

人類学博物館紀要 第 35 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 35 号

南山大学人類学博物館

2017



神子柴型尖頭器（北村コレクション）

巻頭言

人類学博物館がリニューアル・オープンして、3年が過ぎた。この間、「触る展示」は高く評価され、日本空間デザイン協会の空間デザイン賞 2014 と日本展示学会の展示学会賞作品賞をいただくことができた。さらに今年になって、名古屋ライトハウスからも感謝状をいただいている。まことに光栄の至りである。

だが、われわれはこうした評価に甘んじてはいけなない。むしろ、高い評価をいただいたことをプレッシャーとすら感じて、より一層、理想の実現に向わなければならない。

マネジメントの発想で言えば、刻一刻と変化する状況の中で、有効に機能していたものはやがては陳腐化してしまう、ということである。

そのために、われわれは、リニューアル5年目を目途に、博物館の運営と活動に対する外部評価を行うことを考えている。今日、博物館評価 Museum Evaluation はかなり浸透してきたものと思う。だが、多くの場合、業績評価的な面が強く、特に数値で表れる来館者数などが重視される傾向があるのではないだろうか。だが、数値目標に集中することは、博物館のもつ他の重要な機能から目をそらすことになってしまう。特に、長期にわたる利用者との信頼関係の醸成などは、中々評価としては表れにくい。

これからの博物館が、自らの運営と活動に対し、また外部評価においても考慮すべきことは、博物館のミッションであり、博物館利用者の明確化であり、博物館を利用することによって生み出される価値であり、博物館の役割の現状と展望であるに違いない。これはマネジメントの大御所である P. ドラッカーが優れたミッション・ステートメントの条件として挙げた「自分たちの事業は何か」「顧客は誰か」「顧客にとっての価値は何か」「自分たちの事業はこれからどうなのか」「自分たちの事業はどうあるべきか」という5項目を博物館的に言い換えたものである。

博物館は成熟した社会にとって必要不可欠なものであるという信念は変わらない。しかし、自分が信じているだけでは一人よがり過ぎない。博物館がこの社会に存在し得る理由は社会からの信託にある、ということは、すでに欧米の博物館・美術館では当然の前提となっている。日本ではどうであろうか。

博物館界の指定席に座る博物館には、中々状況を変えることは難しいかもしれない。その点、大学博物館の席は自由席である。こうしたマージナルな場から、あり得るべき方向を模索する。大学博物館とはまさにそのような場である。

2017年1月
南山大学人類学博物館

2014 年度に寄贈された石器コレクション

如法寺慶大

1. はじめに

2014 年度、南山大学人類学博物館には、考古学、民族学に関連する様々な資料が寄贈された。本報告は、その一つである北村一郎氏・二郎氏の石器コレクションを紹介するものである。当該コレクションを収集したと伝わる北村一郎氏、二郎氏は、考古学を専門とする人物ではなく、それぞれの興味関心のなかで石器を集めたようであり、その数は 300 点以上にものぼる。その内容は、縄文時代や弥生時代の石器、さらには海外の石器をも含んだものとなっている。本報告はこのコレクションについて、現在までの整理作業の結果を、資料リストと写真図版とを併せて紹介していく。

この章では、まず本報告の構成と整理作業の方法についてまとめる。第二章では、コレクションの収集経緯と、その概要をまとめ、第三章では整理作業によって分類をした石器を、それぞれの形態の特徴とともに紹介する。この分類作業は寄贈当時の分類を参考にしつつ、名古屋市博物館の川合剛氏の協力を得て行った。最後の章では、本コレクションの現時点における評価と今後の展望を述べる。

今回の整理作業は、計測・写真撮影・分類・資料リストと資料台帳の作成を行った。資料の計測では、石器の最大長・最大幅・最大厚の 3 か所を測った。写真撮影では、名古屋市博物館の杉浦秀昭氏に委託をし、集合写真を中心に 47 点を撮影した。分類作業では、名古屋市博物館の川合剛氏の協力を得ながら、それぞれの形態の特徴に沿った分類を試みた。また、こうした整理作業とともに資料リストと資料台帳の作成を進めた。

資料リストには、図版番号・通し番号・種類・出土地・時期・寸法・石材・備考を載せている。以下では、リストの備考に記す内容について説明していく。備考では、主に寄贈時に資料に注記されている、もし

くは残されていた情報を記している。「メモ」とは、おそらく収集者が残したであろうメモのことを指し、寄贈当時から資料に付随していたものである。「注記」とは、寄贈当時から資料に記されていた文字情報のことであり、多くは地名である。なお、誰がこの注記を施したかについては不明である。「袋（封筒）記載事項」とは、寄贈時に石器を入れていた袋や封筒に書かれていた文字情報のことである。寄贈された時点で、一部の石器は袋や封筒、メモによってある程度の区別がなされ、名称がつけられていた。袋（封筒）記載事項を備考に記した資料は、寄贈当時はその袋や封筒に入れられていたことを示す。

2. 寄贈された北村一郎氏・二郎氏コレクション

本コレクションは、縄文時代や弥生時代、海外の石器が含まれ、時期や地域を別にした多様な石器によって構成されている。このことは大きな特徴である。収集は、名古屋大学医学部口腔外科教授であった北村一郎氏、および一郎氏の弟で歯科医の二郎氏の両名が中心となって行われたと伝わる。これらは 2014 年度に北村一郎氏の孫にあたる椎名敏一氏より寄贈された。

北村一郎氏は、書画、茶器、カメラ、植物栽培など多趣味で、その趣味の一環として石器を収集したものと思われる。一方で、北村二郎氏は名古屋市矢場町にて歯科医を開業したが、1920 年頃アメリカ合衆国へ留学している。コレクションに含まれる海外の石器は、その折に入手された可能性が考えられる。それぞれの収集経路は不明確な点も多いため推測によるところが大きいですが、いずれにせよ資料の収集背景には両名の力によるところが大きかったものと思われ、様々な経緯・経路があったと推測される。そのなかで、東北地方などの日本各地から出土したと思われる石器と、例えば北米などといった海外で製作されたと思われる石器が混在するコレクションになったと考えられる。

具体的な出土地は、資料に注記されたりメモが残されたりと、記録化されたものもあるが、不明なものが大半を占めている。そのため、コレクション全体では出所不明と言わざるを得ない。

3. 石器の分類

多様な石器が集められている当該コレクションであるが、日本列島では見ることができないものが何十点含まれている。この石器は尖頭器や石鏃に多く、こうした石器は海外での収集品である可能性が高い。そのため、分類作業にあたって、まずは日本列島と海外で区分し、次に石器の形態的特徴をもとに分類作業を行った。この分類において、石器名称は日本で用いられる一般的な器種名を用いることにし、海外の石器などそれらに該当しない資料は、報告者による便宜的な名称を用いている。

3-1. 日本列島の石器

ここで紹介するのは日本列島における縄文時代、弥生時代の石器である。石斧をはじめ石匙、尖頭器など様々な器種のもものが集められており、なかでも最も点数が多いのが石鏃である。時期や地域によって様々な形状がみられる石鏃の整理作業では、主に佐原真（1964）や鈴木道之助（1981）を参考にし、基部の形状と茎の有無による分類を試みた。

打製石斧 [写真図版番号 1-1、通し番号 1～8]

打製石斧は、その形態的特徴から短冊形、分銅形、撥形の三種類に区別した。短冊形石斧は、両側辺が直線的な長方形、もしくはそれに近い形状をした石斧である（1～3）。分銅形石斧は、両辺の中央部に内側に向かって大きな抉りがみられ、抉りの上下両側に調整加工が加えられる（4～6）。撥形石斧は、基部から刃部にかけて両側辺が外側に広がり、三味線の撥の形状に類似している（7～8）。

磨製石斧 [写真図版番号 1-2、通し番号 9～15]

磨製石斧は、7点ともに全体が研磨されている。13は、側縁部中央に段差がみられ、これは擦切技法による製作の痕跡と思われる。15は、中央よりやや基部寄りの位置に、主面から左側面にかけて半周する抉りがみられる。収集時のメモでは「石刀頭部彫刻」とあるが、ここでは柄に装着するための抉りの加工が施された磨製石斧と推測する。

縦型石匙 [写真図版番号 2-1、通し番号 16～33]

石匙には縦型と横型とがある。縦型石匙は、刃部の長軸上につまみをもつ形状をしている。刃部が湾曲し

たもの、刃部先端が台形状のもの、全体が丸みをもつものなど、バラエティに富んだ形状をしている。

横型石匙 [写真図版番号 2-2、通し番号 34～40]

横型石匙は、長軸線に直交する側につまみをもつ形状をしている。つまみを基点に左右対称の形状をもつものがほとんどであるが、40は左右対称に近い形状をしている。

石鏃 [写真図版番号 3-1、通し番号 41～58]

石鏃は、その形態的特徴から、基部の両側縁が膨らみ明瞭なつまみの形がつくられるもの、全体が細く棒状につくられるもの、基部から先端にかけて逆三角形状につくられるもの、の三種類に区別した。

スクレイパー [写真図版番号 3-2、通し番号 59～61]

スクレイパーは、剥片の側縁部に加工調整をすることでつくられる石器で、大きさや形態は一様ではない。下呂石を石材とする60は石器表面にローリングを受けた痕跡がみられる。

尖頭器 [写真図版番号 4-1、4-2、通し番号 62～65]

尖頭器は、先鋭な先端部が形成された槍先形の石器である。64は、両面に調整が施され、幅広扁平で鋭利な側縁刃部を有する形態から、縄文時代草創期の神子柴型尖頭器の可能性が高い。

有舌尖頭器 [写真図版番号 5-1、通し番号 66～70]

有舌尖頭器は、尖頭器の基部に茎を作り出したものである。68は、刃部全体に鋸歯状の整形が施されている。赤色チャートを石材とする69には、斜状並行剥離がみられる。

凹基無茎石鏃 [写真図版番号 5-2～10-1、通し番号 71～152]

石鏃については、基部の形状と茎の有無によって分類する。

凹基無茎石鏃は、基部の形状がくぼみ、茎のつくりが無いものである。ここでは、基端の幅が両側に広がるもの、逆に内側に狭まるもの、脚部に鋏形鏃の特徴がみられるもの、を区別している。

基端の幅が両側に広がり、かつ基部のくぼみが4.0mm以上と深いもの（71～99）、基部のくぼみが4.0mm未満と浅いもの（100～128）、基端の幅が内側に向かって狭まるもの（129～131）、基端脚部の先が角ばった形状をしているもの（132～144）がある。なお、石材に黒曜石が用いられているもの（145～152）は8点あり、ここでは石材のカテゴリーとして、まとめて撮影をしている。

凹基有茎石鏃 [写真図版番号 10-2、通し番号 153～

157]

基部の中央にくぼみがつくられ、かつ茎のつくりが有るもの。

凸基有茎石鏃 [写真図版番号 11-1 ~ 13-1、通し番号 158 ~ 204]

基部の形状が突出し、かつ茎のつくりが有るもの。基辺の突出が強いもの (158 ~ 176)、基辺の突出が弱いもの (177 ~ 204) がある。

平基有茎石鏃 [写真図版番号 13-2・14-1、通し番号 205 ~ 214]

基部の形状が直線を成し、かつ茎のつくりが有るもの。205 ~ 212 は縄文時代のもの、213 と 214 は弥生時代のものと思われる。後者の 2 点は、先端部の欠損がみられる。

平基無茎石鏃 [写真図版番号 14-2、通し番号 215 ~ 221]

基辺の形状が直線を成し、かつ茎のつくりが無いもの。

円基鏃 [写真図版番号 15-1、通し番号 222 ~ 225]

基辺の形状が丸みを帯びているもの。

尖基鏃 [写真図版番号 15-2、通し番号 226 ~ 228]

基辺の形状が尖るもの。

飛行機鏃・アメリカ式石鏃 [写真図版番号 16-1、通し番号 229 ~ 231]

特殊な形状をもつ石鏃で、基部の四角が出っ張り、かつ茎のつくりが有るものを飛行機鏃とした (229・231)。アメリカ式石鏃は、主に東北地方、北陸地方に分布し、三角形の鏃身の基辺に近い部分に両側から抉りが入り、基部が逆十字状の形をしたものである。230 はその形状の類似からアメリカ式石鏃と判断した。

有孔磨製石鏃 [写真図版番号 16-2、通し番号 232]

成形された後に全体が研磨された石鏃である。茎が無く基部の中央がくぼむ凹基無茎石鏃で、中央に孔があげられている弥生時代のものである。

石錘 [写真図版番号 17-1、通し番号 233 ~ 235]

233 と 234 には、紐掛け用の溝がつけられている。235 は、上部から下部にかけて膨らみがみられ、上部には円周上に段がつけられている。

石剣 [写真図版番号 17-2、通し番号 236]

236 は、頭部は円筒形に成形され、上部と下部のそれぞれに横方向の線刻がつけられる。胴部は、頭部から先端にかけて楕円形から扁平に近い形へと加工されている。

両頭石棒 [写真図版番号 18-1、通し番号 237]

横断面が楕円形であり、大きさが異なる両端はそれぞれが瘤状に作り出されている。

鋸歯状石器 [写真図版番号 18-2、通し番号 238]

石器中央部から先端部にかけて湾曲し、刃部全体に鋸歯状の加工が施されている石器である。石材は、北海道の花十勝石類似の黒曜石と考えられる。

未成品 [写真図版番号 19-1、通し番号 239・240]

239 と 240 は、石鏃と玉の未成品と考えられる。240 は、穿孔作業を行った痕跡がみられる。

3-2. 海外の石器

ここからは海外のものと考えられる石器を紹介する。主に北アメリカ大陸の石器の集成資料 (Justice 1987, 2002a, 2002b) や、川合剛氏の所見を参考にしながら、それぞれの形状的特徴によって分類をした。

尖頭器 [写真図版番号 19-2、通し番号 241 ~ 246]

基部の形状が直線的なもの、中央がへこむものがみられる。

有舌尖頭器 [写真図版番号 20-1、通し番号 247 ~ 256]

基部の茎の有る尖頭器である。茎の形状に違いがみられるが、同一カテゴリーとしてまとめている。

凹基無茎石鏃 [写真図版番号 20-2、通し番号 257 ~ 264]

茎が無く基部中央にくぼみがみられる。

凸基有茎石鏃 [写真図版番号 20-2、通し番号 265 ~ 272]

茎が有り基部中央が突出しているもの。

平基有茎石鏃 [写真図版番号 21-1、通し番号 273 ~ 278]

茎が有り基部の形状が直線を成すもの。

二股式石鏃 [写真図版番号 21-1、通し番号 279 ~ 286]

基部の形状が二股に分かれているもの。その形状には様々な違いがみられるが、ここでは同一カテゴリーとしてまとめている。

かえしつき有茎石鏃 [写真図版番号 21-2、通し番号 287 ~ 305]

鏃身の基部の両側から切り込みが入れられ、矢印形をした形状のもの。

アメリカ式有茎石鏃 [写真図版番号 22-1、通し番号 306 ~ 317]

基部に近い両側から抉りがはいり、基部が逆十字の形状を成す、いわゆるアメリカ式石鏃に類似した石鏃である。

円基鏃 [写真図版番号 22-2、通し番号 318]

基辺が丸みを帯びた形状をしており、側辺が鋸歯状となる。

篋状石器 [写真図版番号 22-2、通し番号 319]

全体が三角形の形状をした篋状の石器。

石錐 [写真図版番号 22-2、通し番号 320]

全体を細身の棒状にし、先端を尖らせた形のもの。基部から先端に向かう中間の辺りにくびれの加工がみられる。

未成品 [写真図版番号 22-2、通し番号 321・322]

321、322 は両者ともに、何らかの石器への製作途中にある未成品と思われる、特に 321 は三角形の形状から石鏃の可能性が考えられる。

名称不明 [写真図版番号 23-1、通し番号 323・324]

323 は、柄に対して刃部が平行になるように斧身が取り付けられた縦斧に類似した形状をもつ。324 は、刃部が大きく湾曲した三日月に類似した形状に成形された石器である。

石包丁 [写真図版番号 23-2、通し番号 325]

平面形が長方形の磨製石包丁。一片の長辺が背となり、もう一方が直線刃となる。中央に紐を通す孔がある。注記に「板垣氏蒙古より持参」とあることからモンゴルとの関係も考えられる石器である。

石杵 [写真図版番号 24-1、通し番号 326]

円筒形に整形された杵状の磨製石器である。持ち手と思われる上部の径が小さく、そこから下部にかけて太くなる形状をもつ。325 と同様に、「蒙古」という注記があることから、モンゴルとの関係が考えられる石器である。

4. おわりに

様々な石器が混在する北村一郎氏・二郎氏コレクションは、収集者自身による分類が行なわれた様子がみられることから、資料に対する関心は高かったものと思われる。現時点において、コレクションの評価

を定めるのは避けることにするが、多少なりとも収集経路がわかっている点や、石器に注記などの情報が残されている点など、研究資料として用いることも可能と考えられる。また、実物資料であることから博物館教育活動の教材として活用するのも可能であろう。今後は、このような研究・教育資料としての活用方法についても考えていきたい。

本コレクションを整理し報告書を作成するにあたり、名古屋市博物館の川合剛氏には石器分類の貴重な知見をいただき、杉浦秀昭氏には資料撮影の依頼を引き受けていただいた。記して感謝を申し上げたい。

参考文献

- 五味一味 1983 「石匙」、加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究 第9巻縄文人の精神文化』、雄山閣、259-271頁。
- Justice, D. Noel
1987 *Stone Age Spear and Arrow Points of the Midcontinental and Eastern United States*. Indiana: Indiana University Press.
- 2002a *Stone Age Spear and Arrow Points of California and the Great Basin*. Indiana: Indiana University Press.
- 2002b *Stone Age Spear and Arrow Points of the Southwestern United States*. Indiana: Indiana University Press.
- 佐原真 1964 「石器」『紫雲出』、香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会、70-97頁。
- 坂本和也 1995 「アメリカ式石鏃考」『みちのく発掘一菅原文也先生還暦記念論集一』、菅原文也先生還暦記念論集刊行会、211-235頁。
- 須藤隆司 2008 「神子柴型尖頭器の形態的枠組み—大型扁平両面調整石器の歴史的見方—」、林茂樹・上伊那考古学会編『神子柴 後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかかる移行期石器群の発掘調査と研究』、信毎書籍出版センター。
- 鈴木道之助 1981 『図録 石器の基礎知識Ⅲ』、柏書房。
- 矢島國雄・前山精明 1983 「石錐」、加藤晋平・小林達雄・藤本強編『縄文文化の研究 第7巻道具と技術』、雄山閣、117-128頁。

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
1-1	1	KMi-13	打製石斧	日本列島	縄文時代	10.4	3.9	1.4		
	2	KMi-147	打製石斧	日本列島	縄文時代	8.8	4.3	1.4	下呂石	メモ：無莖石鏃
	3	KMi-307	打製石斧	日本列島	縄文時代	13	5.8	27.5	片岩	メモ：打製分銅状石斧・縄文時代中期位（4500年-5000年位前）五ヶ
	4	KMi-14	分銅形打製石斧	日本列島	縄文時代	10	8.2	2.7		注記：業連光寺発見（黒字）
	5	KMi-303	分銅形打製石斧	日本列島	縄文時代	10	8.4	3.8		注記：①「石斧」 ②「上野国勢多郡下ハコダ村」 ③「32.25/4」（赤字）メモ：打製分銅状石斧・縄文時代中期位（4500年-5000年位前）五ヶ
	6	KMi-304	分銅形打製石斧	日本列島	縄文時代	13.1	9.7	1.9		注記：「武蔵村山」（赤字） メモ：打製分銅状石斧・縄文時代中期位（4500年-5000年位前）五ヶ
	7	KMi-305	撥形打製石斧	日本列島	縄文時代	9.5	8.5	1.7		注記：①「幸郡百華発見」（黒字） ②「28.5.17」 メモ：打製分銅状石斧縄文時代中期位（4500年-5000年位前）五ヶ
	8	KMi-306	撥形打製石斧	日本列島	縄文時代	12.3	7.5	2.9		注記：①「武蔵立川」（赤字） ②「1948」（赤字） メモ：打製分銅状石斧・縄文時代中期位（4500年-5000年位前）五ヶ
1-2	9	KMi-7	磨製石斧	日本列島	縄文時代	10.6	4.4	1.6		
	10	KMi-8	磨製石斧	日本列島	縄文時代	6.6	2.1	1.1		
	11	KMi-9	磨製石斧	日本列島	縄文時代	7.3	3.6	1.4		
	12	KMi-308	磨製石斧	日本列島	縄文時代	12.9	4.5	2.6		注記：判読不能（赤字） メモ：①磨製定角式石斧 ②縄文時代の中期にははじめて晩期に
	13	KMi-309	擦切磨製石斧	日本列島	縄文時代	10.5	4.2	2.5		メモ：①磨製短冊状石斧 ②縄文時代後期以後
	14	KMi-310	磨製石斧	日本列島	縄文時代	9.4	50	2.4		メモ：①御物石型 ②磨製石斧
	15	KMi-311	抉り入り磨製石斧	日本列島	縄文時代	12.1	5.4	4.3		メモ：①頭部彫刻石刃 ②縄文時代晩期
2-1	16	KMi-1	縦型石匙	日本列島	縄文時代	3.9	1.7	0.3		袋記載事項：有柄石ナイフ（曲刃）
	17	KMi-2	縦型石匙	日本列島	縄文時代	4.7	2.6	1.0		袋記載事項：有柄石ナイフ（曲刃）
	18	KMi-3	縦型石匙	日本列島	縄文時代	8.4	2.1	0.6		注記：「●●●●」（カタカナ・黒字・判読不能） 袋記載事項：有柄石ナイフ（曲刃）
	19	KMi-4	縦型石匙	日本列島	縄文時代	6.7	1.5	0.6		袋記載事項：有柄石ナイフ（曲刃）
	20	KMi-5	縦型石匙	日本列島	縄文時代	6.1	3.5	1.0		袋記載事項：有柄石ナイフ（曲刃）
	21	KMi-6	縦型石匙	日本列島	縄文時代	9.1	2.2	0.9		袋記載事項：有柄石ナイフ（曲刃）
	22	KMi-10	縦型石匙	日本列島	縄文時代	10.2	5.0	1.0		
	23	KMi-11	縦型石匙	日本列島	縄文時代	7.4	2.8	0.8		
	24	KMi-12	縦型石匙	日本列島	縄文時代	5.5	2.6	0.5		
	25	KMi-120	縦型石匙	日本列島	縄文時代	6.9	2.7	1.1		注記：「礎ヶ関」（黒字） 封筒記載事項（緑色）：有柄ナイフ（元峰）
	26	KMi-121	縦型石匙	日本列島	縄文時代	6.0	3.5	0.7		封筒記載事項（緑色）：有柄ナイフ（元峰）
27	KMi-122	縦型石匙	日本列島	縄文時代	7.2	2.7	0.7		封筒記載事項（緑色）：有柄ナイフ（元峰）	
28	KMi-123	縦型石匙	日本列島	縄文時代	7.1	1.9	0.5		注記：「ホトモリ」（元は赤字） 封筒記載事項（緑色）：有柄ナイフ（元峰）	

寄贈石器一覧 (1)

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
2-1	29	KMi-124	縦型石匙	日本列島	縄文時代	7.4	2.6	0.5		封筒記載事項 (緑色) : 有柄ナイフ (元峰)
	30	KMi-125	縦型石匙	日本列島	縄文時代	5.7	4.0	0.7		封筒記載事項 (茶色) : 有柄ナイフ (楕円形)
	31	KMi-126	縦型石匙	日本列島	縄文時代	7.8	5.3	0.9		封筒記載事項 (茶色) : 有柄ナイフ (楕円形)
	32	KMi-317	縦型石匙	日本列島	縄文時代	6.3	1.7	0.6		注記 : 「十腰内」 (黒字) 袋記載事項 : 石錐
	33	KMi-334	縦型石匙	日本列島	縄文時代	6.4	3.4	1.1		
2-2	34	KMi-163	横型石匙	日本列島	縄文時代前期	5.6	10.3	1.3		注記 : 「武蔵村山」 (赤字)
	35	KMi-164	横型石匙	日本列島	縄文時代前期	3.6	7.4	0.8		袋記載事項 : 横型石匙 (かわはぎ)
	36	KMi-165	横型石匙	日本列島	縄文時代前期	3.5	4.8	1.0		袋記載事項 : 横型石匙 (かわはぎ)
	37	KMi-166	横型石匙	日本列島	縄文時代前期	4.5	5.7	0.9		袋記載事項 : 横型石匙 (かわはぎ)
	38	KMi-289	横型石匙	東北・北海道地方	縄文時代	2.7	2.6	0.9		袋記載事項 : 有柄横型石ナイフ
	39	KMi-290	横型石匙	東北・北海道地方	縄文時代	2.5	4.5	0.6		袋記載事項 : 有柄横型石ナイフ
	40	KMi-291	横型石匙	中部地方	縄文時代	2.3	3.3	0.7		袋記載事項 : 有柄横型石ナイフ
3-1	41	KMi-36	石錐	日本列島	縄文時代	2.1	1.3	0.4		注記 : 「阿●●誉●」 (赤字・一部判読不能)
	42	KMi-98	石錐	日本列島	縄文時代	2.5	0.9	0.5		メモ : 有莖石錐
	43	KMi-137	石錐	日本列島	縄文時代	3.5	1.7	0.6		メモ : 無莖石錐三角形
	44	KMi-138	石錐	日本列島	縄文時代	3.6	1.7	0.4		メモ : 無莖石錐三角形
	45	KMi-145	石錐	東北地方	縄文時代	2.1	1.1	0.3		メモ : 無莖石錐三角形
	46	KMi-154	石錐	日本列島	縄文時代	5.2	1.1	0.6		注記 : 「●●●●●●」 (赤字・判読不能) 袋記載事項 : 小型柳葉形ポイント 推定アメリカ型石錐
	47	KMi-197	石錐	日本列島	縄文時代	2.4	1.3	0.3		
	48	KMi-198	石錐	日本列島	縄文時代	3.7	0.7	0.3		
	49	KMi-202	石錐	日本列島	縄文時代	3.6	0.7	0.4		
	50	KMi-214	石錐	日本列島	縄文時代	5.8	1.7	0.5		
	51	KMi-256	石錐	日本列島	縄文時代	4	1.5	0.4		
	52	KMi-261	石錐	日本列島	縄文時代	3	1.6	0.6		
	53	KMi-318	石錐	日本列島	縄文時代	2.1	2.2	0.5		
	54	KMi-319	石錐	日本列島	縄文時代	3.3	1.7	0.8		
55	KMi-321	石錐	日本列島	縄文時代	5.5	3.0	0.6			
56	KMi-322	石錐	日本列島	縄文時代	2.2	2.2	0.7			
57	KMi-323	石錐	日本列島	縄文時代	1.8	2.6	0.4		注記 : 「岐阜●」 (赤字・一部判読不能)	
58	KMi-333	石錐	日本列島	縄文時代	2.1	0.5	0.4		メモ : 有柄石錐 (長手)	
3-2	59	KMi-167	スクレイパー	日本列島	縄文時代	5.5	2.4	1.0	チャート	袋記載事項 : ①無柄石ナイフ
	60	KMi-169	スクレイパー	日本列島	縄文時代	7.5	3.1	1.0	下呂石	袋記載事項 : ①無柄石ナイフ
	61	KMi-175	スクレイパー	日本列島	縄文時代	2.6	1.9	0.7		
4-1	62	KMi-160	尖頭器	日本列島	縄文時代	4.2	1.4	0.8		袋記載事項 : 小型柳葉形ポイント 推定アメリカ製石錐
	63	KMi-168	尖頭器	東北地方	縄文時代	7.2	2.9	1.2	珪質頁岩	袋記載事項 : 無柄石ナイフ
	65	KMi-320	尖頭器	東北地方	縄文時代	12.2	3.8	1.7	珪質頁岩	袋記載事項 : 有柄ナイフ (直刃)
4-2	64	KMi-299	神子柴型尖頭器	日本列島	縄文時代 草創期	17.7	4.2	1.1	ホルン フェルス	注記 : 「埼玉縣砂川村出土」 (赤字) 袋記載事項 : 大型柳葉形石槍

寄贈石器一覧 (2)

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
5-1	66	KMi-153	有舌尖頭器	日本列島	縄文時代	7.4	1.7	1.0	チャート	袋記載事項：有舌ポイント（外国製ならむ）
	67	KMi-253	有舌尖頭器	日本列島	縄文時代	5.3	2.0	0.6		注記：「南亜米利加？」（赤字）
	68	KMi-254	有舌尖頭器	日本列島	縄文時代	6.5	1.3	0.6	チャート	
	69	KMi-292	有舌尖頭器	東海地方	縄文時代	6.2	1.8	0.9	チャート （赤色）	袋記載事項：①有舌ポイント（小型の石槍）
	70	KMi-298	有舌尖頭器	日本列島	縄文時代	16.5	5.2	1.6	黒曜石	袋記載事項：①有肩石槍 ②推定アメリカ製
5-2	71	KMi-17	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	3	1.4	0.5		
	72	KMi-27	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.2	1.5	0.3		
	73	KMi-28	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.7	1.5	0.3		
	74	KMi-29	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.6	0.2		
	75	KMi-30	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.4	0.4		注記：「河内コンダ」（赤字）
	76	KMi-32	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.5	0.4		
	77	KMi-33	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.8	1.8	0.4		
	78	KMi-38	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.3	0.4		
	79	KMi-39	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.7	0.3		
	80	KMi-41	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.4	0.3		
6-1	81	KMi-43	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.5	0.4		
	82	KMi-45	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.2	1.3	0.4		
	83	KMi-46	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.5	0.3		
	84	KMi-47	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.5	0.3		
	85	KMi-54	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.5	0.3		
	86	KMi-56	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.1	0.3		
	87	KMi-78	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.2	1.3	0.3		
	88	KMi-146	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.4	1.0	0.3		
	89	KMi-218	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	3.7	1.9	0.4		注記：「●●●●」（赤字・判読不能）
	90	KMi-220	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.8	1.7	0.3		
6-2	91	KMi-221	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	3.0	1.7	0.5		
	92	KMi-231	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.8	0.3		
	93	KMi-237	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.0	1.5	0.3		
	94	KMi-239	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.5	0.4		
	95	KMi-241	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.2	1.6	0.3		
	96	KMi-246	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.4	1.5	0.3		
	97	KMi-249	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.4	1.5	0.3		
	98	KMi-250	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.0	0.2		
	99	KMi-258	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	3.0	1.7	0.4		注記：「岐阜縣」（赤字）
7-1	100	KMi-20	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.9	1.8	0.4		
	101	KMi-22	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.8	0.3		
	102	KMi-23	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.6	1.8	0.5		
	103	KMi-24	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	3.2	2.1	0.3		
	104	KMi-25	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.6	1.6	0.2		
	105	KMi-31	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.0	1.6	0.3		
	106	KMi-35	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.6	0.4		
	107	KMi-44	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.5	0.4		
	108	KMi-50	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.9	1.5	3.0		
	109	KMi-52	凹基無茎石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.3	0.3		

寄贈石器一覧 (3)

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
7-2	110	KMi-53	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.4	1.2	0.3		
	111	KMi-58	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	0.9	0.2		
	112	KMi-60	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.2	0.3		
	113	KMi-61	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.4	1.1	0.3		
	114	KMi-63	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.5	0.3		
	115	KMi-64	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.3	1.5	0.4		
	116	KMi-79	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.7	2.2	0.4		
	117	KMi-81	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.4	0.4		
	118	KMi-83	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.0	1.4	0.3		
	119	KMi-207	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.2	0.4		
8-1	120	KMi-208	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.5	0.4		
	121	KMi-212	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.3	1.1	0.4		
	122	KMi-232	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.5	1.2	0.4		
	123	KMi-243	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.1	1.4	0.4		
	124	KMi-244	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.1	1.5	0.3		
	125	KMi-248	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.5	0.3		
	126	KMi-257	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.0	1.7	0.4		注記：岐阜●（一部判読不能）
	127	KMi-264	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.5	2.2	0.4		
	128	KMi-316	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.3	0.3		
8-2	129	KMi-15	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.2	1.5	0.4		注記：●●●（赤字・判読不能）
	130	KMi-19	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.8	1.4	0.4		
	131	KMi-26	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.5	0.5		
9-1	132	KMi-34	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.8	0.4		
	133	KMi-42	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.7	1.7	0.3		
	134	KMi-48	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.2	1.4	0.3		
	135	KMi-49	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.0	1.2	0.2		
	136	KMi-51	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.1	0.2		
	137	KMi-55	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.3	0.3		
9-2	138	KMi-57	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.4	0.3		
	139	KMi-59	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.4	1.4	0.3		
	140	KMi-70	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.3	1.5	0.2		
	141	KMi-222	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.1	1.9	0.4		
	142	KMi-236	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.9	1.7	0.3		
	143	KMi-242	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.2	0.3		
	144	KMi-245	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.6	0.3		
10-1	145	KMi-66	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.1	0.3	黒曜石	
	146	KMi-67	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.3	0.3	黒曜石	
	147	KMi-68	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.2	2	0.3	黒曜石	
	148	KMi-69	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.3	0.4	黒曜石	
	149	KMi-71	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.9	1.3	0.2	黒曜石	
	150	KMi-72	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.7	0.5		
	151	KMi-73	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.7	0.3		
	152	KMi-201	凹基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.5	0.3	黒曜石	
10-2	153	KMi-74	凹基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.9	1.4	0.3		
	154	KMi-87	凹基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.2	1.6	0.5	黒曜石	
	155	KMi-108	凹基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.3	0.3		メモ：有莖石鏃
	156	KMi-116	凹基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.3	0.4		メモ：有莖石鏃
	157	KMi-206	凹基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.3	0.4		

寄贈石器一覽 (4)

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
11-1	158	KMi-86	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.9	1.1	0.5		メモ：有莖石鏃
	159	KMi-92	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.4	1.8	0.5		
	160	KMi-95	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.7	1.1	0.5		
	161	KMi-96	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.9	1.2	0.5		メモ：有莖石鏃
	162	KMi-101	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.8	1.1	0.4		メモ：有莖石鏃
	163	KMi-106	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.2	1.2	0.5		メモ：有莖石鏃
	164	KMi-117	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.1	0.6		メモ：有莖石鏃
	165	KMi-161	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	4.3	1.5	0.4		袋記載事項：小型柳葉形ポイント 推定アメリカ製石鏃
	166	KMi-177	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.2	0.6		
11-2	167	KMi-178	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.1	1.3	0.5		
	168	KMi-180	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.6	1.3	0.5		
	169	KMi-240	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.8	1.1	0.4		
	170	KMi-259	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	4	1.3	0.5		注記：「●山」(赤字・判読不能)
	171	KMi-286	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	4.8	1.1	0.6		袋記載事項：有莖石鏃推定外国製
	172	KMi-288	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.9	1.4	0.7		袋記載事項：有莖石鏃推定外国製
	173	KMi-324	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.8	1.6	0.4		メモ：有莖石鏃(長手)
	174	KMi-325	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	4.2	1.7	0.5		注記：「阿●関●●●●●」(赤字・ 判読不能)メモ：有莖石鏃(長手)
	175	KMi-328	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.6	1.2	0.5		メモ：有莖石鏃(長手)
12-1	176	KMi-330	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.2	1.0	0.5		メモ：有莖石鏃(長手)
	177	KMi-75	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.3	1.7	0.5		
	178	KMi-76	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.7	1.5	0.4		
	179	KMi-85	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.1	2.0	0.4		メモ：有莖石鏃
	180	KMi-88	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.1	2.0	0.6		注記：「河内コンダ」(赤字) メモ：有莖石鏃
	181	KMi-89	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.3	1.6	0.5		メモ：有莖石鏃
	182	KMi-90	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.2	1.7	0.6		メモ：有莖石鏃
	183	KMi-91	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3	1.7	0.6		注記：「●●●●●」(赤字・判読 不能)メモ：有莖石鏃
	184	KMi-99	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.2	1.2	0.5		メモ：有莖石鏃
12-2	185	KMi-100	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.7	0.7		注記：「●●●●●」(赤字・判読 不能)メモ：有莖石鏃
	186	KMi-102	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.1	1.5	0.5		
	187	KMi-103	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.3	0.5		メモ：有莖石鏃
	188	KMi-105	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.1	0.3		メモ：有莖石鏃
	189	KMi-109	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.6	1.0	0.4		メモ：有莖石鏃
	190	KMi-111	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.6	0.5		メモ：有莖石鏃
	191	KMi-115	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.4	0.5		メモ：有莖石鏃
	192	KMi-118	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.9	1.2	0.4		メモ：有莖石鏃
	193	KMi-119	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.9	1.5	0.3		メモ：有莖石鏃
13-1	194	KMi-179	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.4	1.7	0.4		
	195	KMi-219	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.9	1.2	0.5		
	196	KMi-224	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.9	1.4	0.4		
	197	KMi-225	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.1	1.6	0.4		
	198	KMi-226	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.9	1.6	0.6		
	199	KMi-229	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	3.4	1.7	0.5		注記：「●●」(赤字・判読不能)
	200	KMi-279	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.5	1.3	0.4		袋記載事項：不整形石刃

寄贈石器一覧 (5)

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
13-1	201	KMi-283	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	5.3	1.7	0.6		注記：八文字ほど書かれているが判読不能 袋記載事項：①有莖石鏃②推定外国製
	202	KMi-329	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.9	1.6	0.5		メモ：有莖石鏃（長手）
	203	KMi-331	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.5	0.4		メモ：有莖石鏃（長手）
	204	KMi-332	凸基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.0	1.2	0.5		メモ：有莖石鏃（長手）
13-2	205	KMi-16	平基有莖石鏃	東北地方・北海道	縄文時代晩期	3.0	1.5	0.3		注記：「●●」（赤字・判読不能）
	206	KMi-107	平基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.5	1.4	0.4	サヌカイト	メモ：有莖石鏃
	207	KMi-110	平基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.7	1.1	0.4	サヌカイト	メモ：有莖石鏃
	208	KMi-114	平基有莖石鏃	東北地方・北海道	縄文時代晩期	2.1	1.3	0.4		メモ：有莖石鏃
	209	KMi-228	平基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.6	1.5	0.3	サヌカイト	注記：「●●」（赤字・判読不能）
	210	KMi-234	平基有莖石鏃	東北地方・北海道	縄文時代晩期	2.6	1.2	0.4		
	211	KMi-247	平基有莖石鏃	東北地方・北海道	縄文時代晩期	2.1	1.1	0.3		
	212	KMi-293	平基有莖石鏃	日本列島	縄文時代	4.5	1.8	0.4		注記：「陸奥●●●●」（赤字・判読不能） 袋記載事項：有舌ポイント（小型の石槍）
14-1	213	KMi-112	平基有莖石鏃	日本列島	弥生時代	1.8	1.1	0.4		メモ：有莖石鏃
	214	KMi-181	平基有莖石鏃	日本列島	弥生時代	3.1	1.3	0.6		
14-2	215	KMi-62	平基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.7	1.6	0.4		
	216	KMi-140	平基無莖石鏃	東北地方	縄文時代	2.6	1.7	0.4		注記：「●●」（赤字・判読不能） メモ：無莖石鏃三角形
	217	KMi-141	平基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.2	0.4		メモ：無莖石鏃三角形
	218	KMi-142	平基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.3	1.8	0.5		
	219	KMi-143	平基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2	1.5	0.5		
	220	KMi-144	平基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	1.8	1.5	0.5		メモ：無莖石鏃三角形
	221	KMi-195	平基無莖石鏃	日本列島	縄文時代	2.7	1.6	0.3	黒曜石	
15-1	222	KMi-94	円基鏃	日本列島	縄文時代	2.6	1.4	0.4		メモ：有莖石鏃
	223	KMi-139	円基鏃	日本列島	縄文時代	3.6	1.7	0.4		メモ：無莖石鏃三角形
	224	KMi-204	円基鏃	日本列島	縄文時代	2.6	1.0	0.3		
	225	KMi-326	円基鏃	日本列島	縄文時代	3.2	1.7	0.5		注記：「ホトモリ」（黒字） メモ：有莖石鏃（長手）
15-2	226	KMi-155	尖基鏃	日本列島	縄文時代	4.0	1.2	0.4		袋記載事項：小型柳葉形ポイント 推定アメリカ製石鏃
	227	KMi-156	尖基鏃	日本列島	縄文時代	3.9	1.2	0.5		袋記載事項：小型柳葉形ポイント 推定アメリカ製石鏃
	228	KMi-157	尖基鏃	日本列島	縄文時代	4.6	1.2	0.7		袋記載事項：小型柳葉形ポイント 推定アメリカ製石鏃
16-1	229	KMi-104	飛行機鏃	日本列島	縄文時代	2.4	1.3	0.5		メモ：有莖石鏃
	230	KMi-136	アメリカ式石鏃	日本列島	縄文時代	3.0	1.5	0.6		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	231	KMi-327	飛行機鏃	日本列島	縄文時代	4.0	1.1	0.6		注記：「岐阜縣」（赤字） メモ： 有莖石鏃（長手）
16-2	232	KMi-263	有孔磨製石鏃	日本列島	弥生時代	2.8	1.7	0.3		
17-1	233	KMi-280	石錘	日本列島	縄文時代	3.9	3.0	1.7		注記：「南神」（黒字）
	234	KMi-281	石錘	日本列島	縄文時代	4.5	2.9	1.1		注記：「南神？」（黒字）
	235	KMi-312	石錘	日本列島	弥生時代	9.3	6.1	4.1		注記：「函石濱基塔附近出土品」（黒字） メモ：石錘弥生時代以降

寄贈石器一覧 (6)

図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
17-2	236	KMi-314	石剣	日本列島	縄文時代	14.2	2.6	2.3		
18-1	237	KMi-315	両頭石棒	日本列島	縄文時代	38	5.7	4.0		注記：「岐阜●土岐郡日吉出土 板垣忠二郎式旧●」（赤字・一部判読不能） メモ：両頭石棒縄文時代中期から後期
18-2	238	KMi-162	鋸歯状石器	日本列島	縄文時代？	11.5	4.5	1.3	花十勝石 類似の黒 曜石	袋記載事項：無柄石ナイフ（曲刃）
19-1	239	KMi-176	未成品	日本列島	縄文時代？	3.4	1.0	0.5		
	240	KMi-336	玉の未成品	日本列島	縄文時代？	1.8	2.1	1.5		注記：「陸奥東●●●●●」（赤字・一部判読不能）
19-2	241	KMi-148	尖頭器	海外		6.3	3.4	0.6		メモ：無莖石鏃
	242	KMi-251	尖頭器	海外		5.7	2.0	0.6		
	243	KMi-252	尖頭器	海外		5.7	2.1	0.6		
	244	KMi-294	尖頭器	海外		4.6	4.2	0.6		袋記載事項：①ハート形尖頭器 ②ハート形石刃外国製
	245	KMi-295	尖頭器	海外		5.5	3.2	0.6		袋記載事項：①無莖石鏃状刃器 （外国製）②58年 .5.25 久永先生 鑑定おねがいをした
	246	KMi-296	尖頭器	海外		5.8	2.8	0.7		袋記載事項：①無莖石鏃状刃器 （外国製）②58年 .5.26 久永先生 鑑定おねがいをした
20-1	247	KMi-127	有舌尖頭器	海外		8.5	4.1	1.0		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	248	KMi-128	有舌尖頭器	海外		7.3	3.2	0.8		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	249	KMi-129	有舌尖頭器	海外		6.3	2.9	0.9		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	250	KMi-130	有舌尖頭器	海外		5.9	3.1	0.8		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	251	KMi-131	有舌尖頭器	海外		5.9	3.9	0.6		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	252	KMi-132	有舌尖頭器	海外		5.7	3.6	0.8		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	253	KMi-170	有舌尖頭器	海外		7.7	2.5	0.8		袋記載事項：柳葉形ポイント推定 アメリカ製
	254	KMi-297	有舌尖頭器	海外		6.1	4.0	0.8		袋記載事項：有舌ポイント（大小） アメリカ製
	255	KMi-300	有舌尖頭器	海外		13.8	4.2	0.8		
	256	KMi-301	有舌尖頭器	海外		11.8	3.8	1.1		袋記載事項：有舌ポイント（大小） アメリカ製
20-2	257	KMi-18	凹基無莖石鏃	海外		2.9	1.5	0.6		
	258	KMi-21	凹基無莖石鏃	海外		2.7	3.0	0.9		
	259	KMi-37	凹基無莖石鏃	海外		1.9	1.4	0.4		
	260	KMi-77	凹基無莖石鏃	海外		1.6	2.7	0.4		
20-2	261	KMi-151	凹基無莖石鏃	海外		2.7	2.7	0.7		袋記載事項：長三角形ポイント推定 アメリカ製
	262	KMi-193	凹基無莖石鏃	海外		2.4	2.2	0.5		
	263	KMi-221	凹基無莖石鏃	海外		3.0	1.7	0.5		
	264	KMi-277	凹基無莖石鏃	海外		2.0	1.3	0.3		

寄贈石器一覧 (7)

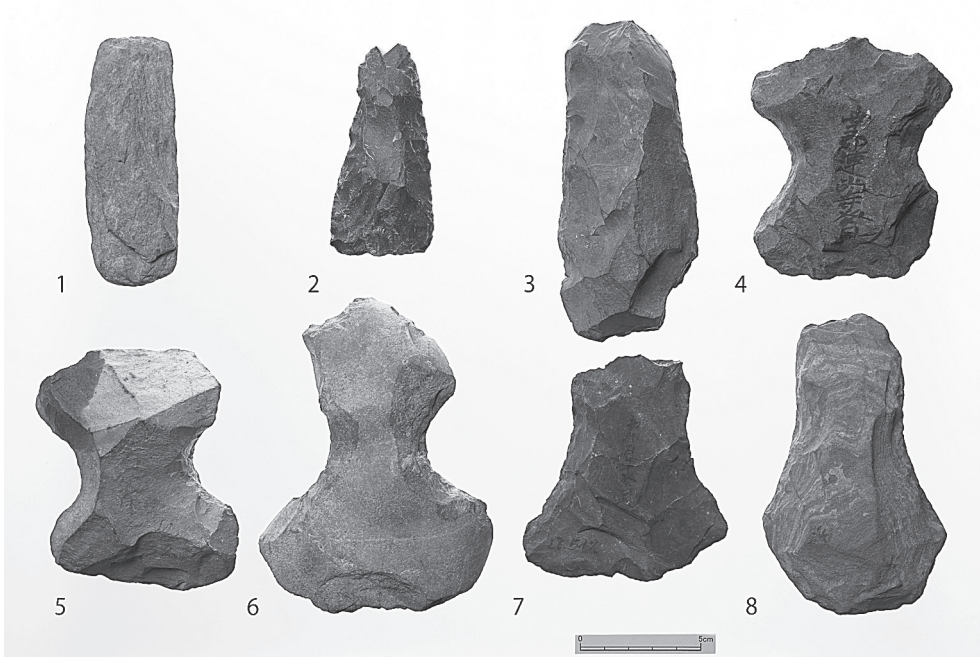
図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
20-2	265	KMi-93	凸基有茎石鏃	海外		2.9	1.6	0.7		
	266	KMi-113	凸基有茎石鏃	海外		2.4	1.0	0.7		
	267	KMi-152	凸基有茎石鏃	海外		3.2	1.5	0.9		袋記載事項：小型石鏃日本製ではないだろうか
	268	KMi-159	凸基有茎石鏃	海外		4.6	1.2	0.6		袋記載事項：小型柳葉形ポイント推定アメリカ製石鏃
	269	KMi-217	凸基有茎石鏃	海外		4.0	1.5	0.5		
	270	KMi-284	凸基有茎石鏃	海外		5.1	1.7	0.9		袋記載事項：有茎石鏃推定外国製
	271	KMi-285	凸基有茎石鏃	海外		4.0	1.2	0.5		袋記載事項：有茎石鏃推定外国製
	272	KMi-287	凸基有茎石鏃	海外		3.6	1.3	0.5		袋記載事項：有茎石鏃推定外国製
21-1	273	KMi-97	平基有茎石鏃	海外		2.4	1.8	0.5		メモ：有茎石鏃
	274	KMi-182	平基有茎石鏃	海外		4.8	1.8	0.6		
	275	KMi-183	平基有茎石鏃	海外		4.3	2.2	0.4		
	276	KMi-213	平基有茎石鏃	海外		0.9	0.5	0.2		
	277	KMi-227	平基有茎石鏃	海外		2.7	1.5	0.3		
	278	KMi-233	平基有茎石鏃	海外		2.8	1.1	0.4		
	279	KMi-184	二股式石鏃	海外		3.4	1.4	0.5		
	280	KMi-189	二股式石鏃	海外		2.5	2.0	0.5		
	281	KMi-191	二股式石鏃	海外		2.2	1.8	0.4		
	282	KMi-200	二股式石鏃	海外		2.0	1.9	0.3		
	283	KMi-216	二股式石鏃	海外		4.7	2.1	0.5		
	284	KMi-260	二股式石鏃	海外		3.7	2.0	0.5		
	285	KMi-265	二股式石鏃	海外		3.8	2.0	0.3		
	286	KMi-268	二股式石鏃	海外		3.0	2.3	0.4		
21-2	287	KMi-133	かえしつき有茎石鏃	海外		4.6	3.9	1.0		封筒記載事項（白色）：所謂アメリカ型石鏃（大小）
	288	KMi-185	かえしつき有茎石鏃	海外		3.3	2.7	0.6		
	289	KMi-186	かえしつき有茎石鏃	海外		3.1	2.6	0.5		
	290	KMi-187	かえしつき有茎石鏃	海外		2.7	1.8	0.4		
	291	KMi-190	かえしつき有茎石鏃	海外		2.7	1.3	0.3		
	292	KMi-192	かえしつき有茎石鏃	海外		3.2	1.4	0.4		
	293	KMi-194	かえしつき有茎石鏃	海外		2.9	1.8	0.4		
	294	KMi-203	かえしつき有茎石鏃	海外		2.7	2.1	0.4		
	295	KMi-205	かえしつき有茎石鏃	海外		3.0	1.4	0.4		
	296	KMi-210	かえしつき有茎石鏃	海外		1.9	1.1	0.4		
	297	KMi-223	かえしつき有茎石鏃	海外		2.8	1.1	0.4		
	298	KMi-235	かえしつき有茎石鏃	海外		1.7	1.2	0.3		
	299	KMi-238	かえしつき有茎石鏃	海外		1.8	1.4	0.4		

寄贈石器一覧 (8)

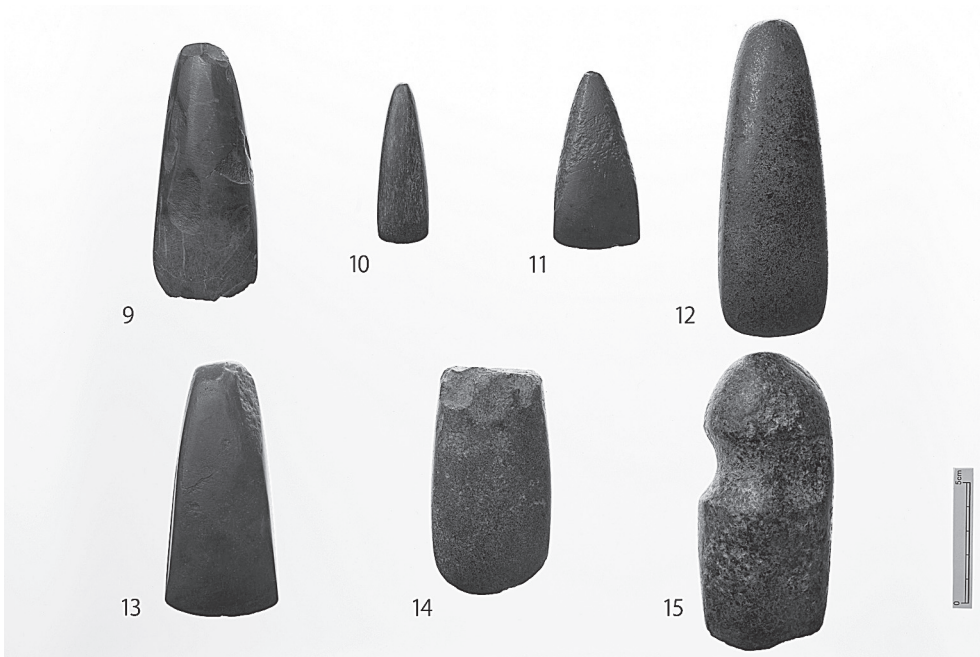
図版 番号	通し 番号	資料番号	種類	出土地	時期	寸法 (cm)			石材	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
21-2	300	KMi-262	かえしつき 有茎石鎌	海外		2.9	1.8	0.2		
	301	KMi-269	かえしつき 有茎石鎌	海外		3.0	1.2	0.4		
	302	KMi-271	かえしつき 有茎石鎌	海外		2.3	1.6	0.3		
	303	KMi-272	かえしつき 有茎石鎌	海外		2.7	1.2	0.3		
	304	KMi-274	かえしつき 有茎石鎌	海外		3.0	1.2	0.4		
	305	KMi-275	かえしつき 有茎石鎌	海外		2.8	1.5	0.4		
22-1	306	KMi-134	アメリカ式 有茎石鎌	海外		4.4	2.2	0.8		封筒記載事項 (白色) : 所謂アメリカ製石鎌 (大小)
	307	KMi-135	アメリカ式 有茎石鎌	海外		3.6	2.7	0.7		封筒記載事項 (白色) : 所謂アメリカ製石鎌 (大小)
	308	KMi-188	アメリカ式 有茎石鎌	海外		3.4	1.8	0.6		
	309	KMi-196	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.7	1.9	0.7		
	310	KMi-209	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.7	1.3	0.3		
	311	KMi-230	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.9	1.6	0.5		
	312	KMi-266	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.6	1.9	0.5		
	313	KMi-267	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.4	1.9	0.5		
	314	KMi-270	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.6	1.2	0.4		
	315	KMi-273	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.3	1.4	0.4		
	316	KMi-276	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.5	1.2	0.4		
317	KMi-278	アメリカ式 有茎石鎌	海外		2.2	1.1	0.4			
22-2	318	KMi-158	円基鎌	海外		4.9	1.2	0.6		袋記載事項 : ①小型柳型ポイント 推定アメリカ製 石鎌
	319	KMi-149	篋状石器	海外		5.9	4.3	1.2		袋記載事項 : 長三角形ポイント推 定アメリカ製
	320	KMi-215	石錐	海外		6.0	1.1	0.6		
	321	KMi-150	未成品	海外		3.9	3.1	0.8		袋記載事項 : 長三角形ポイント推 定アメリカ製
	322	KMi-282	未成品	海外		3.9	2.4	1.1		
23-1	323	KMi-199	名称不明	海外		3.5	1.9	0.5		
	324	KMi-255	名称不明	海外		3.4	3.2	0.3		
23-2	325	KMi-302	石包丁	海外		10.2	5.5	0.9		注記 : 「板垣代蒙古ヨリ持参」 (赤 字) メモ : ①石包丁 ②穂苜具
24-1	326	KMi-313	石杵	海外		15.4	2.8	4.7		注記 : ①蒙古現代石器 (赤字) ② 板垣式 内蒙古ヨリ●来ス (一部 判読不能) (赤字)

寄贈石器一覧 (9)

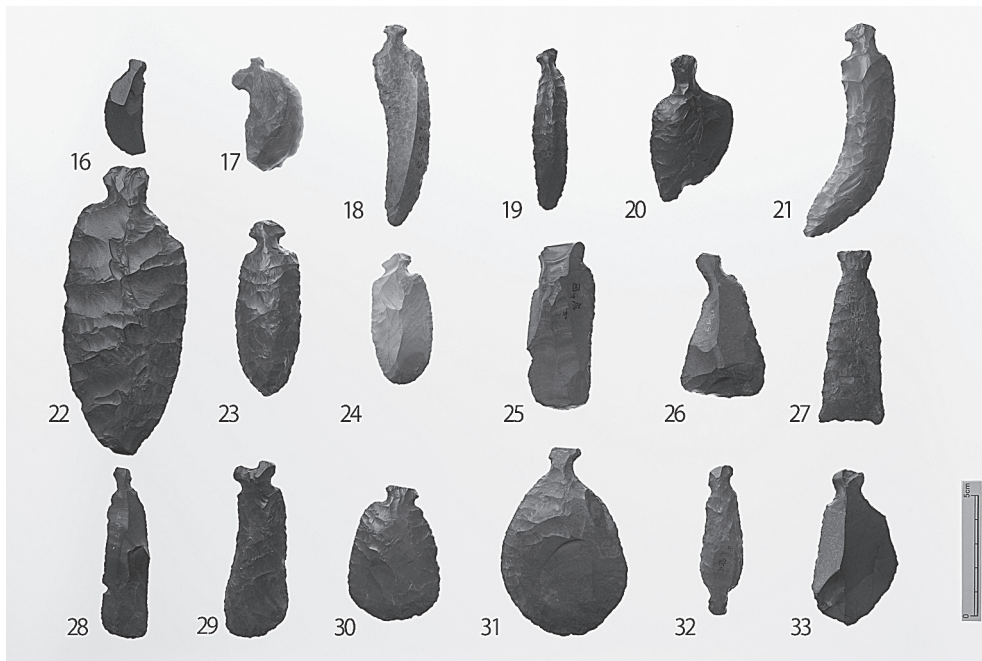
写真図版 1



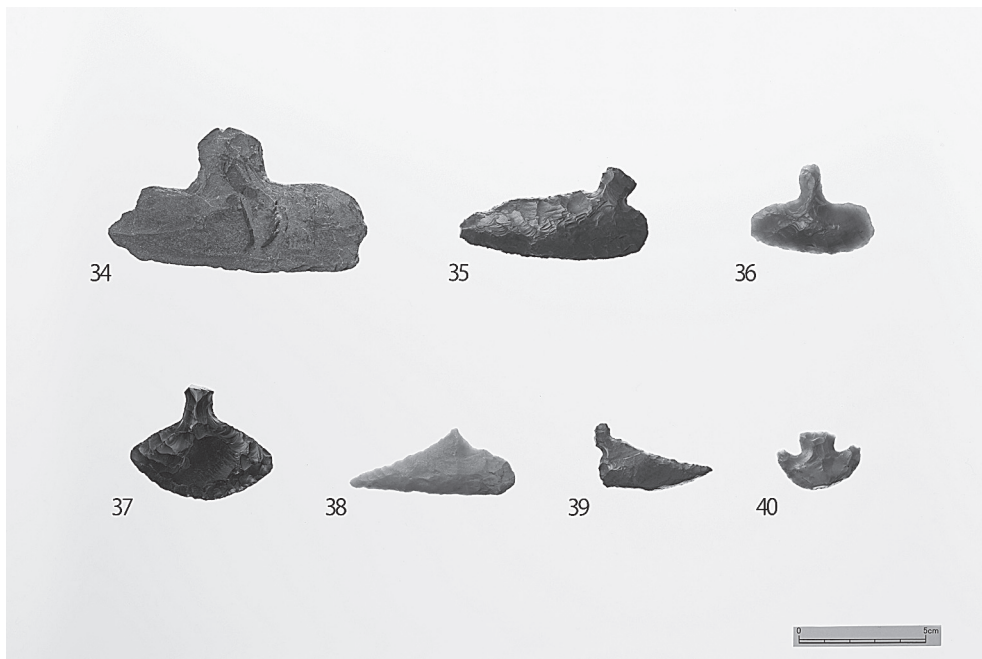
1 打製石斧



2 磨製石斧

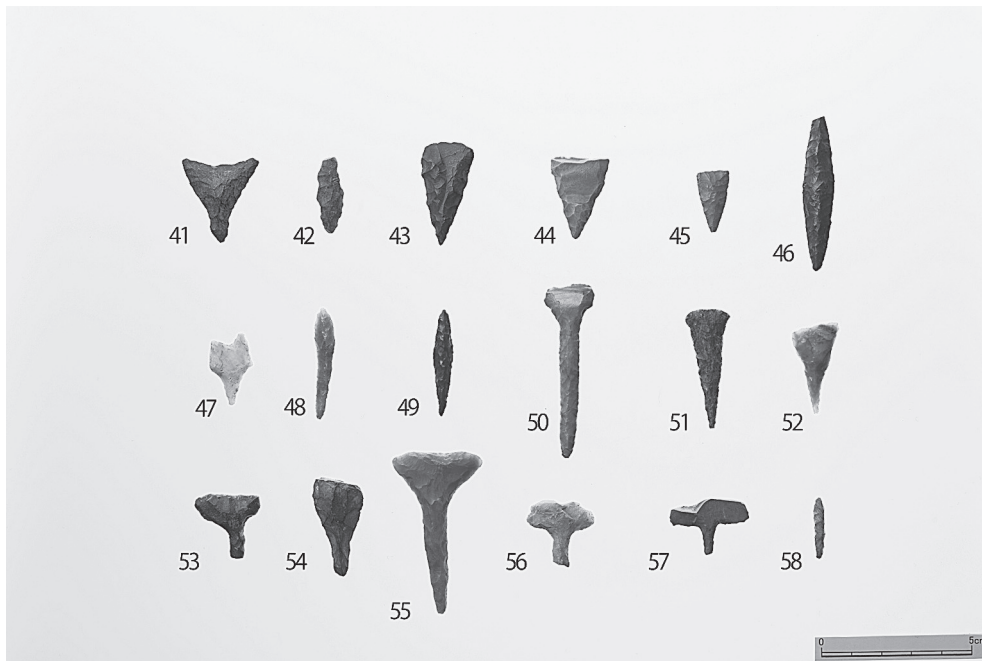


1 縦型石匙

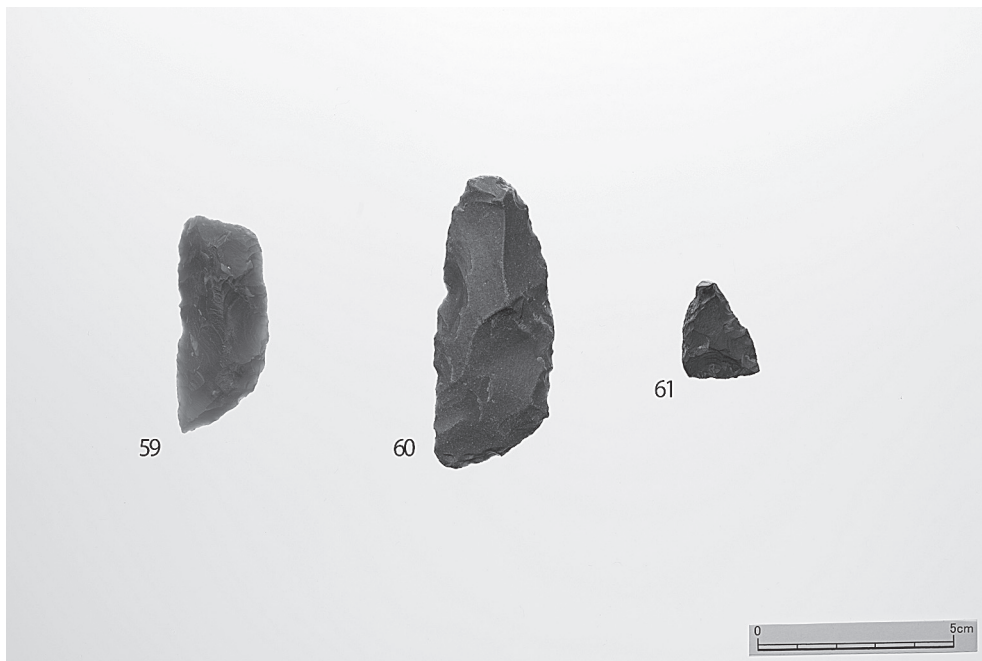


2 横型石匙

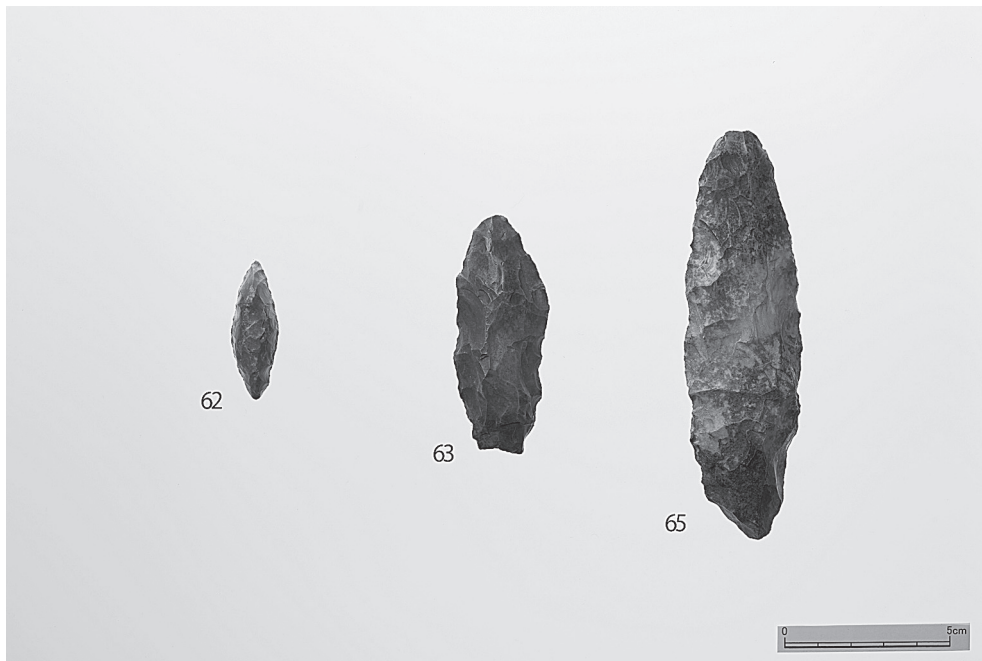
写真図版 3



1 石錐



2 スクレイパー

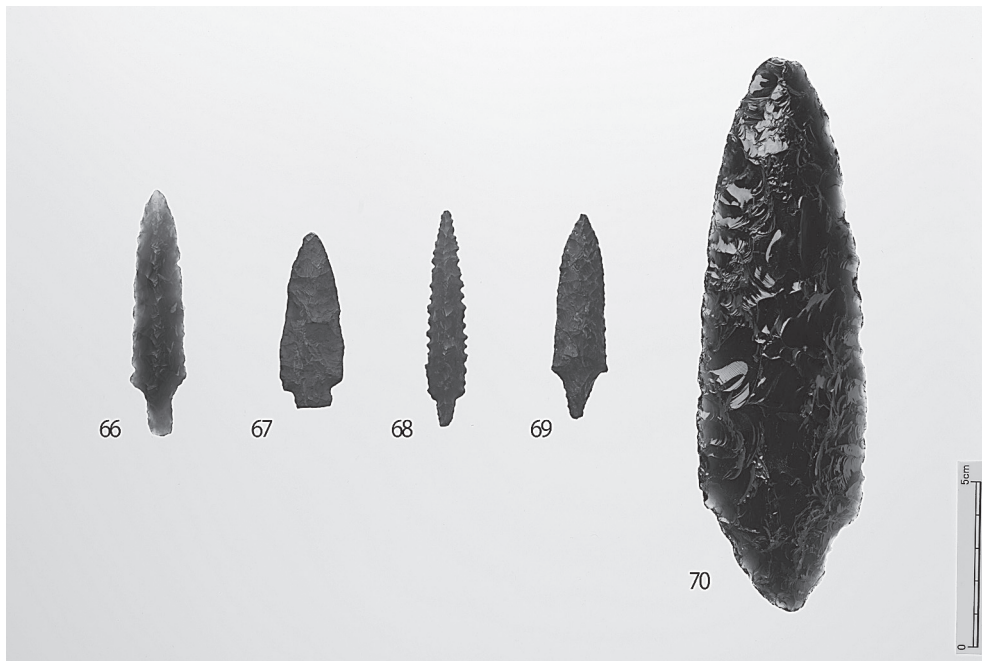


1 尖頭器

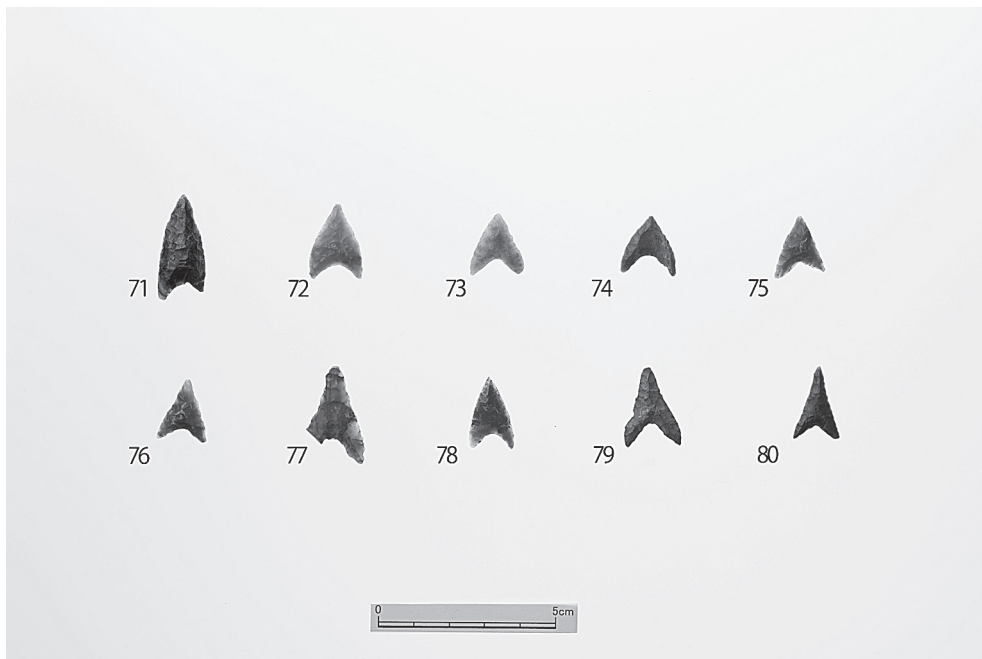


2 神子柴型尖頭器

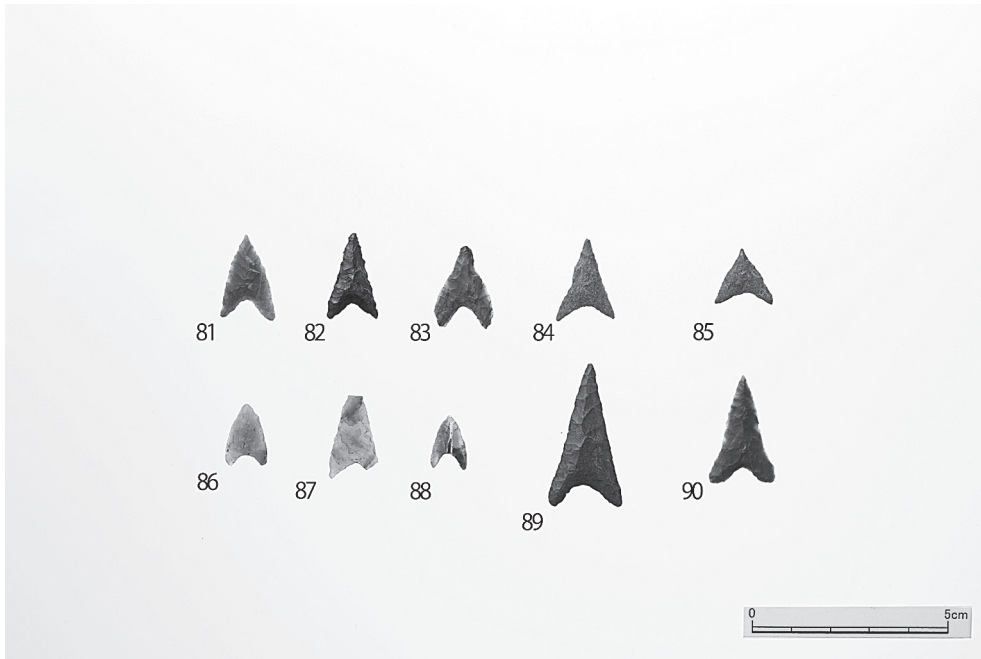
巻頭カラーと同一個体ですが、モノクロ化したときに色が重なったため、文字の色が見えなくなりました。



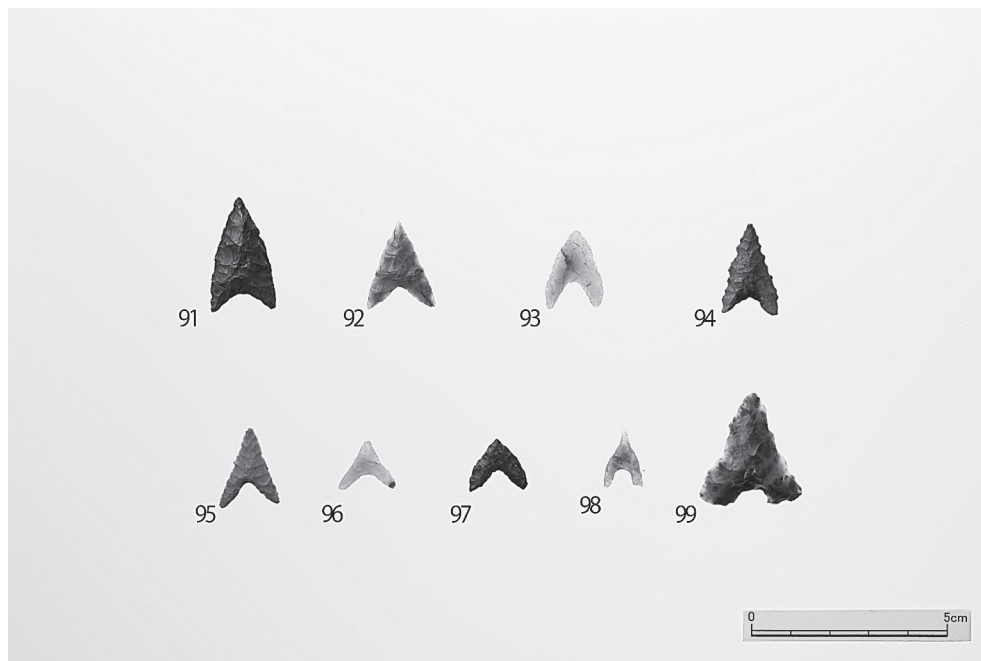
1 有舌尖頭器



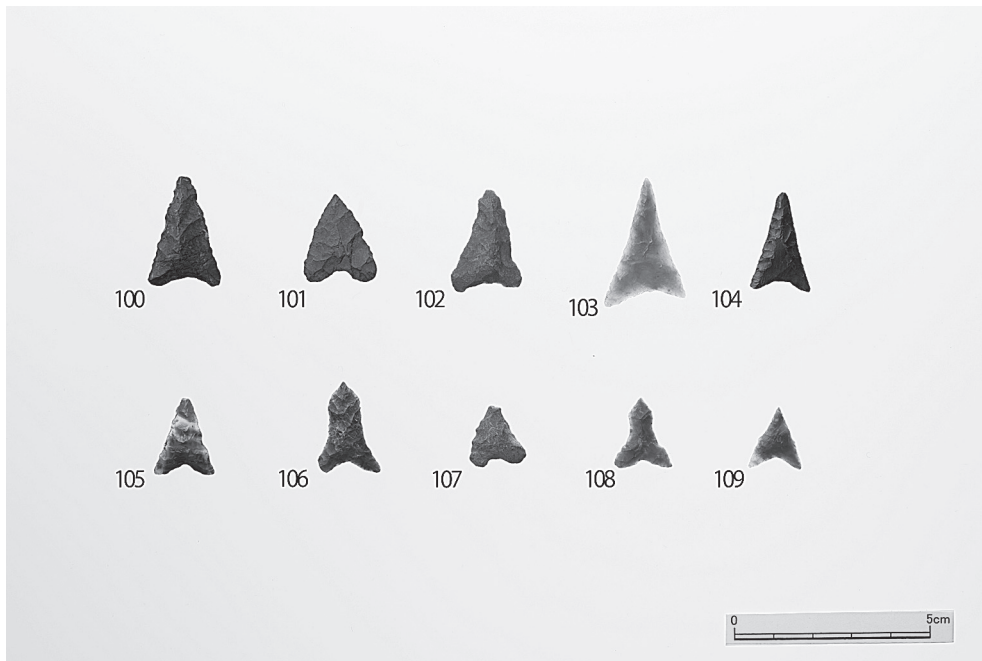
2 凹基無茎石鏃



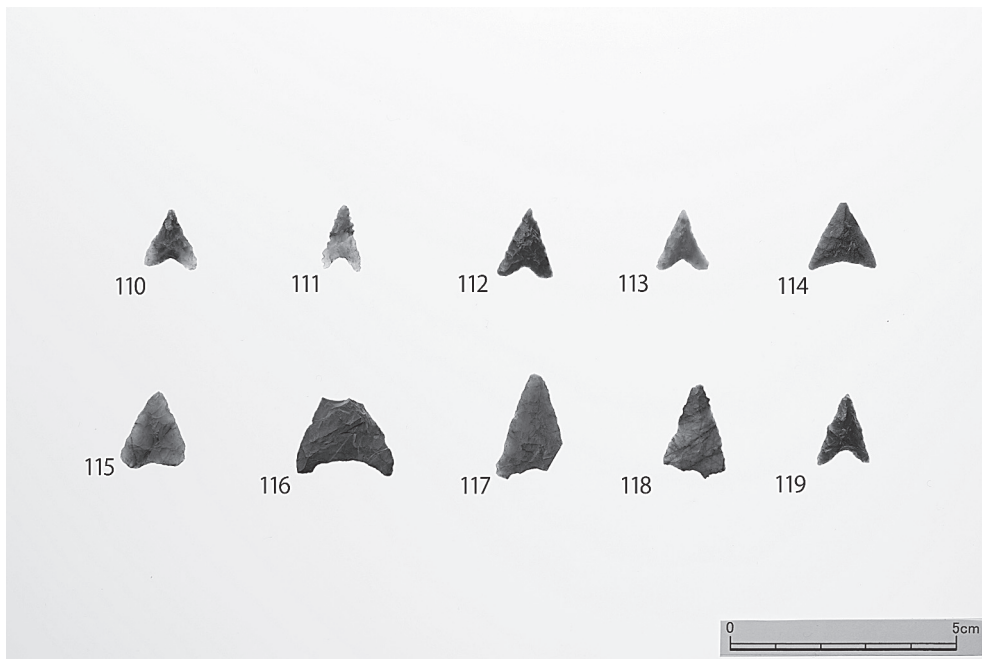
1 凹基無茎石鏃



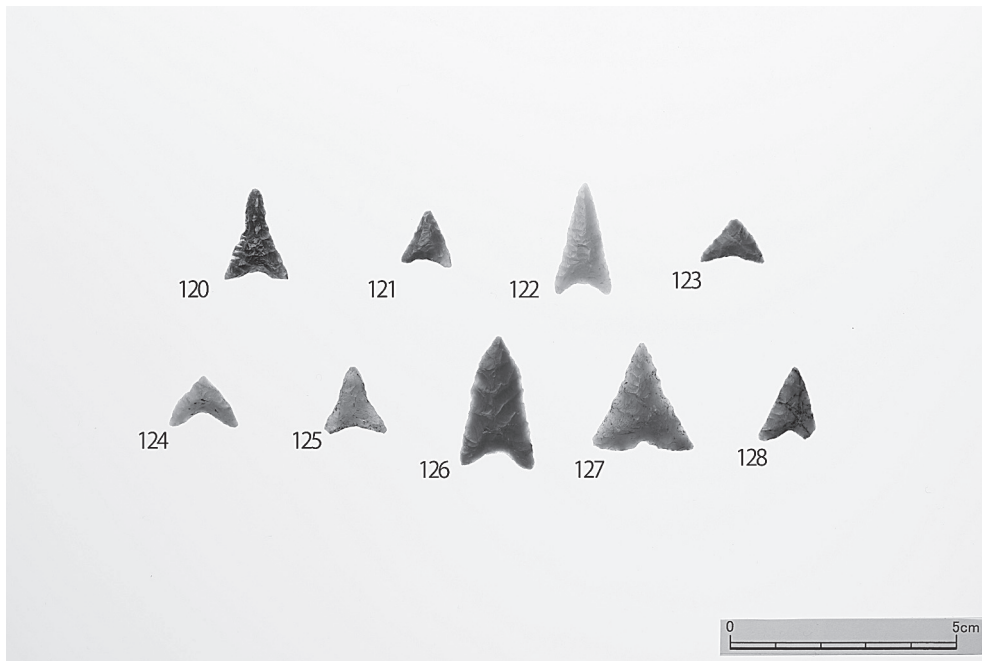
2 凹基無茎石鏃



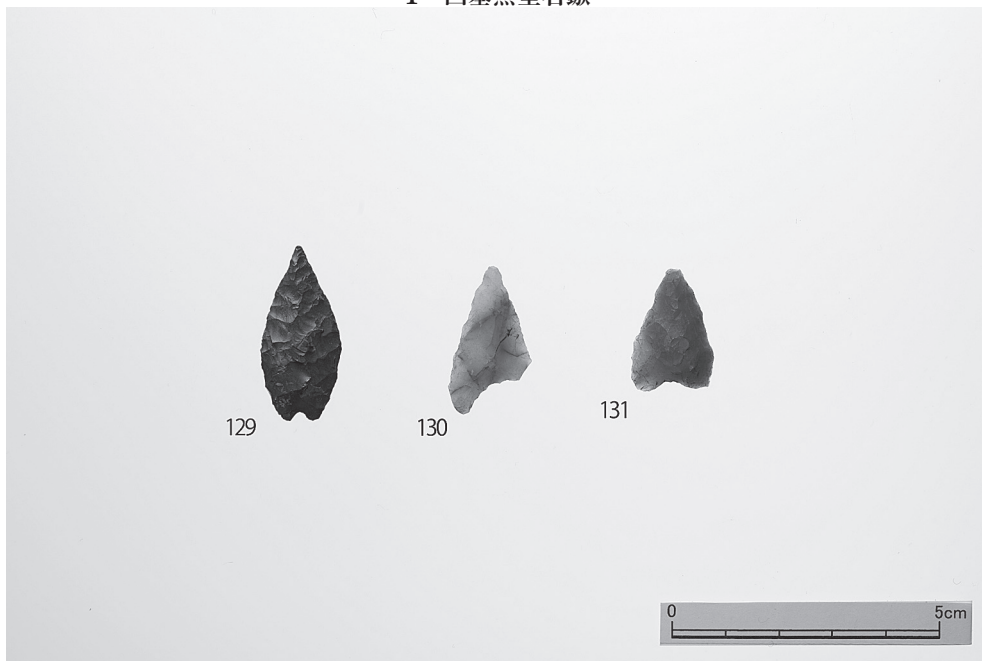
1 凹基無茎石鏃



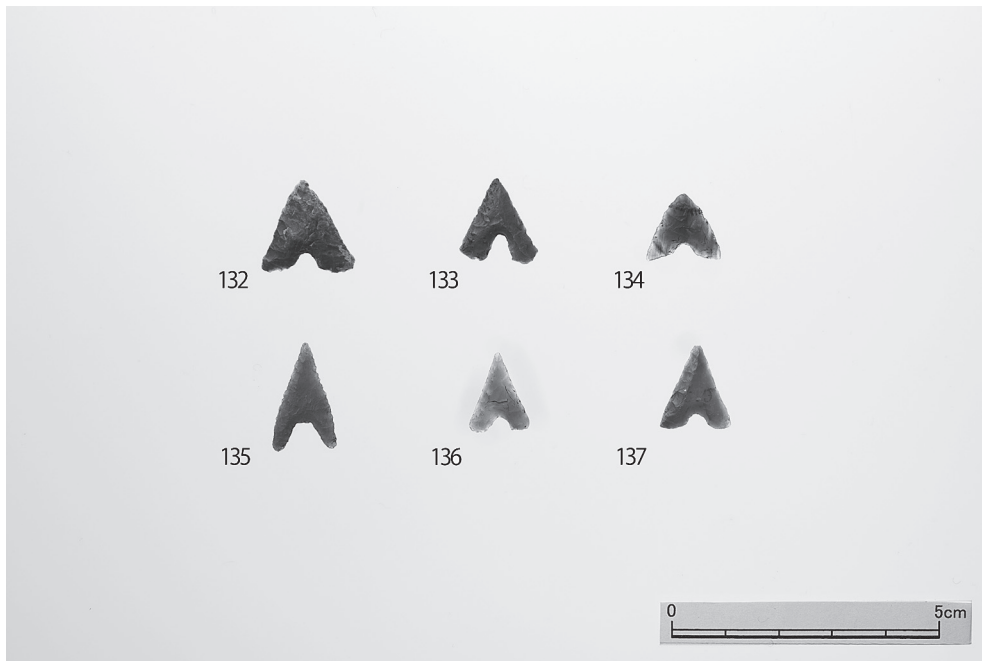
2 凹基無茎石鏃



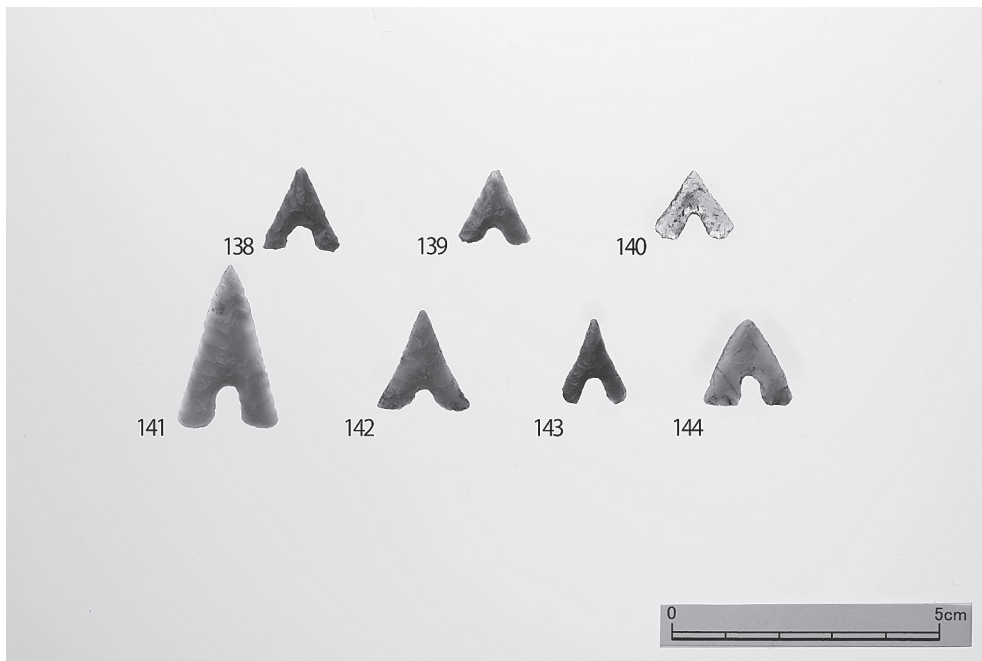
1 凹基無茎石鏃



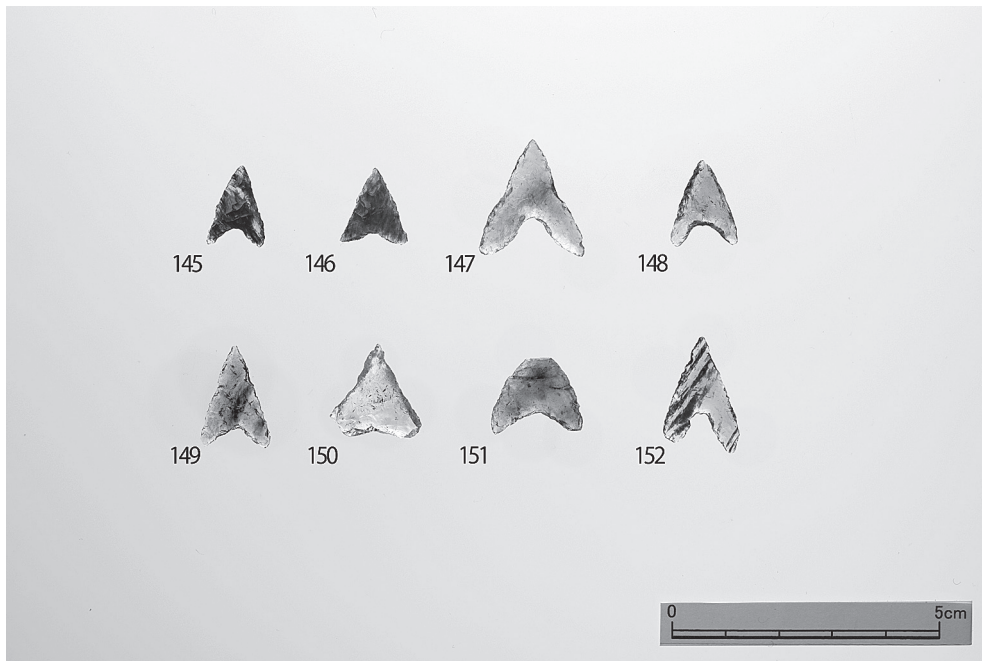
2 凹基無茎石鏃



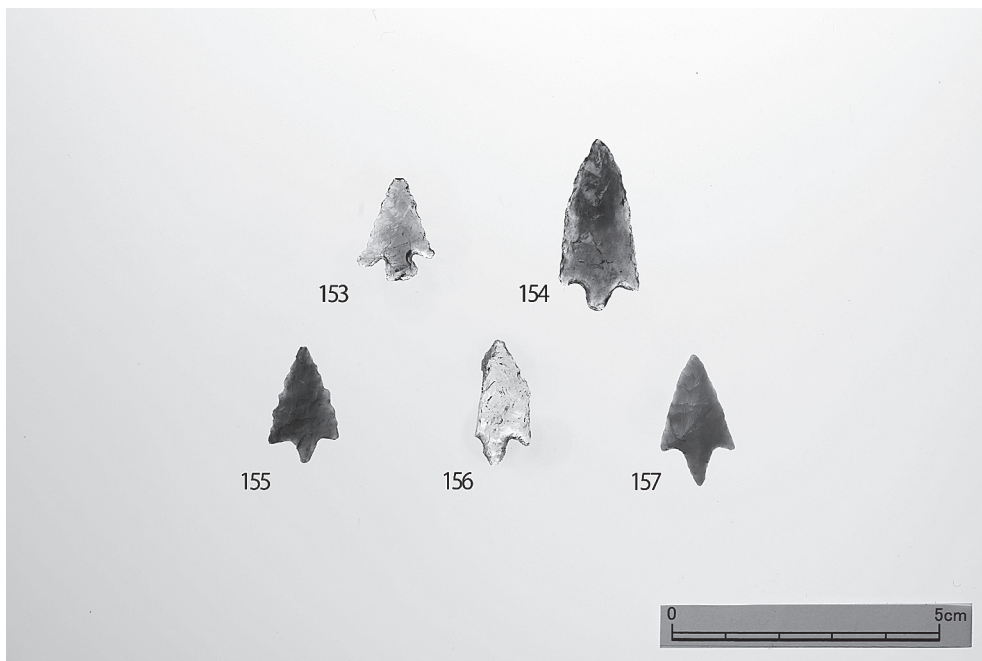
1 凹基無茎石鏃



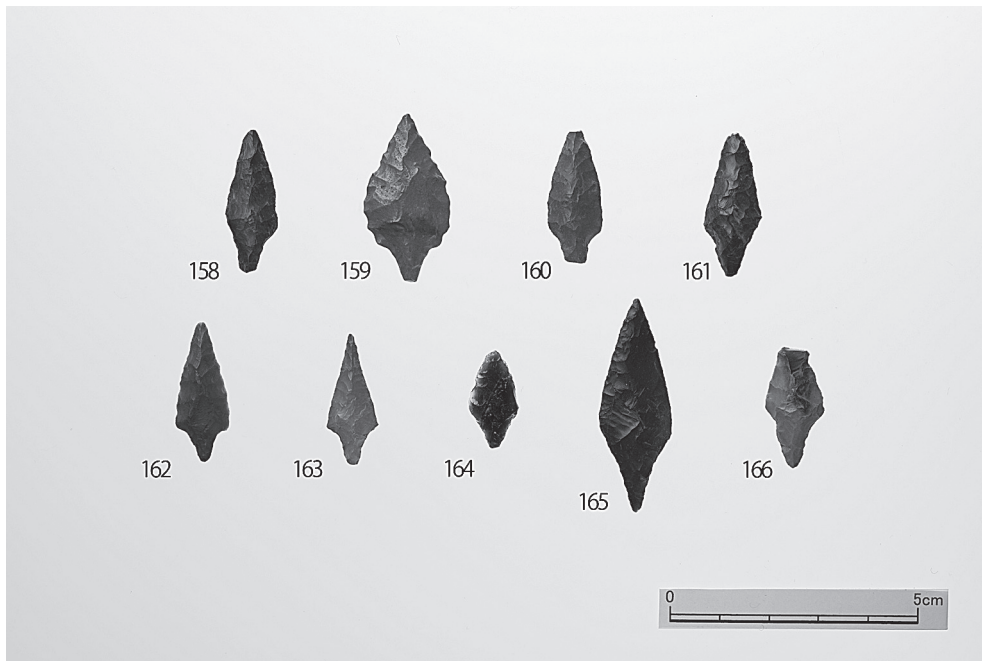
2 凹基無茎石鏃



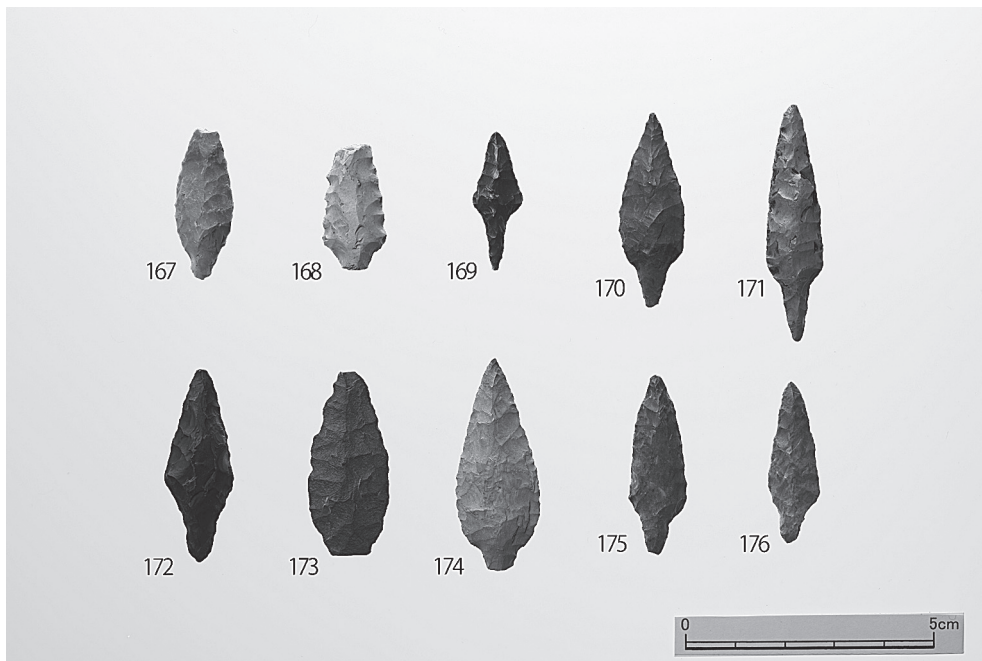
1 凹基無茎石鏃



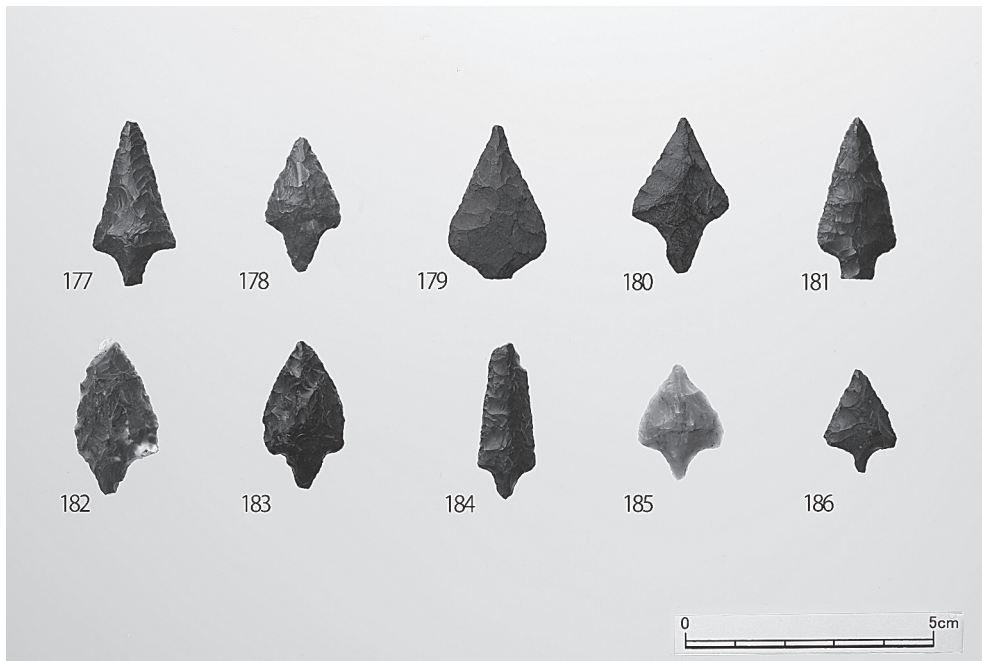
2 凹基有茎石鏃



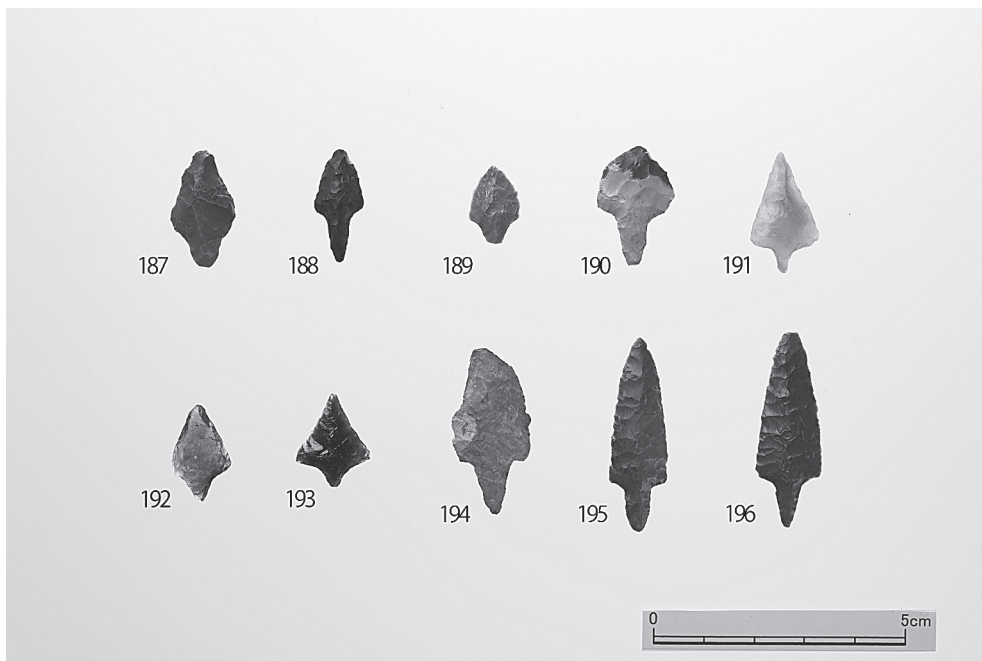
1 凸基有茎石鏃



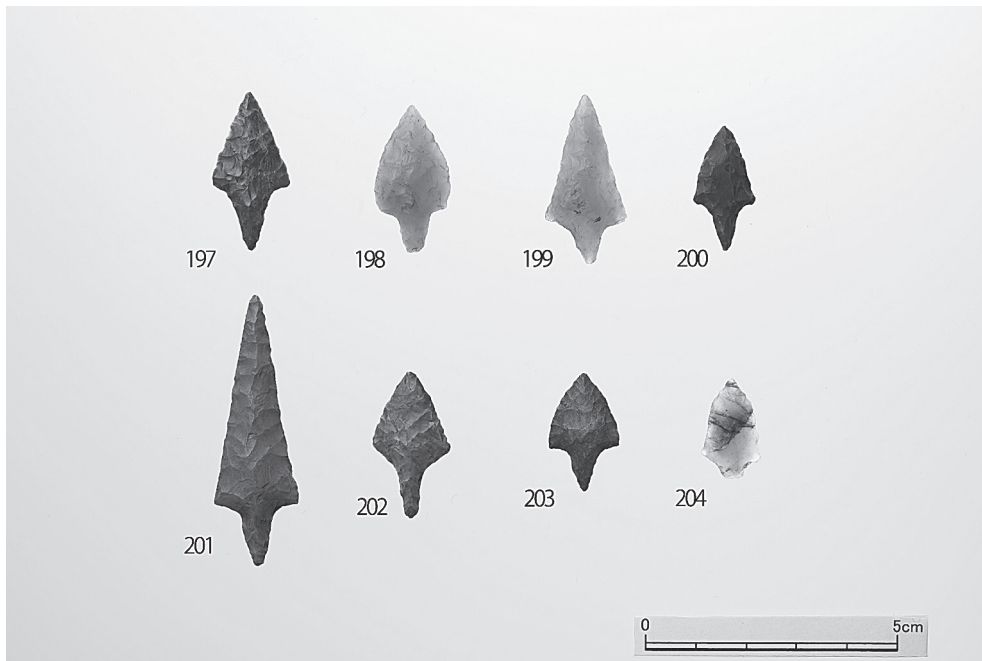
2 凸基有茎石鏃



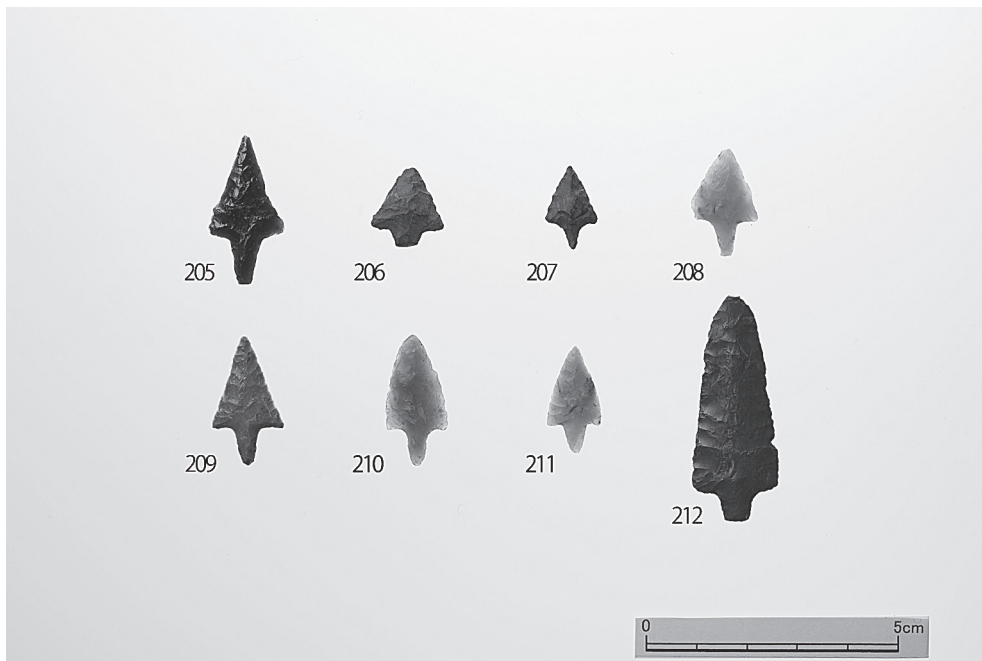
1 凸基有茎石鏃



2 凸基有茎石鏃



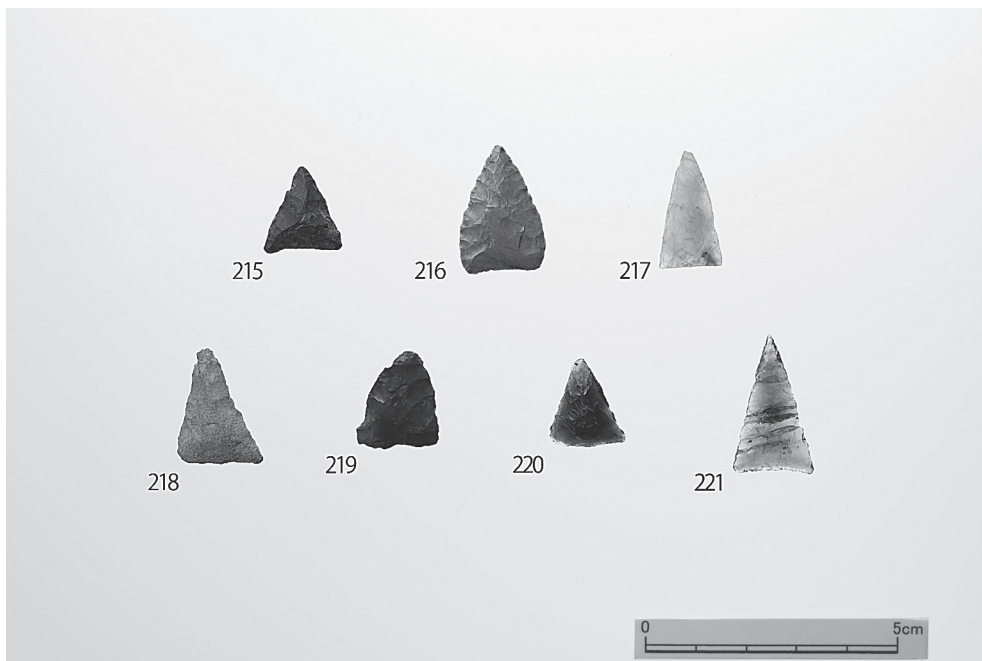
1 凸基有茎石鏃



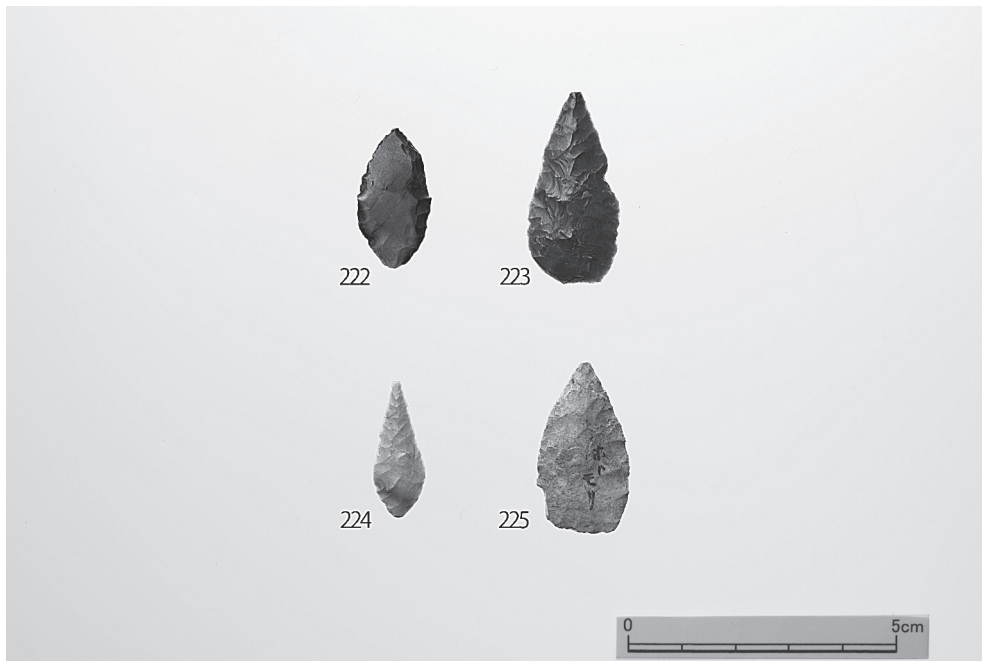
2 平基有茎石鏃



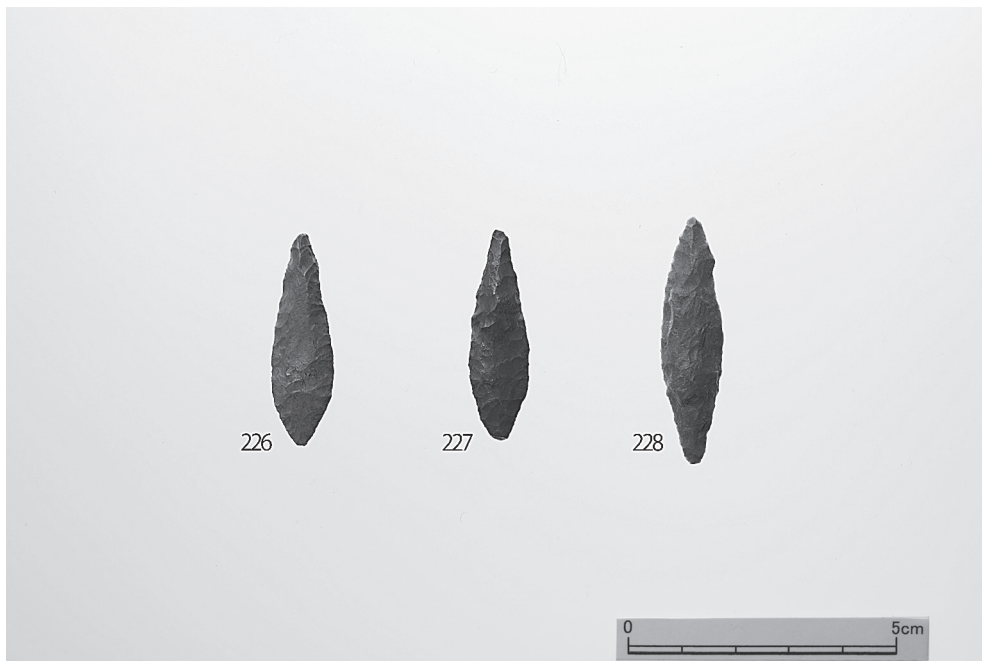
1 平基有茎石鏃



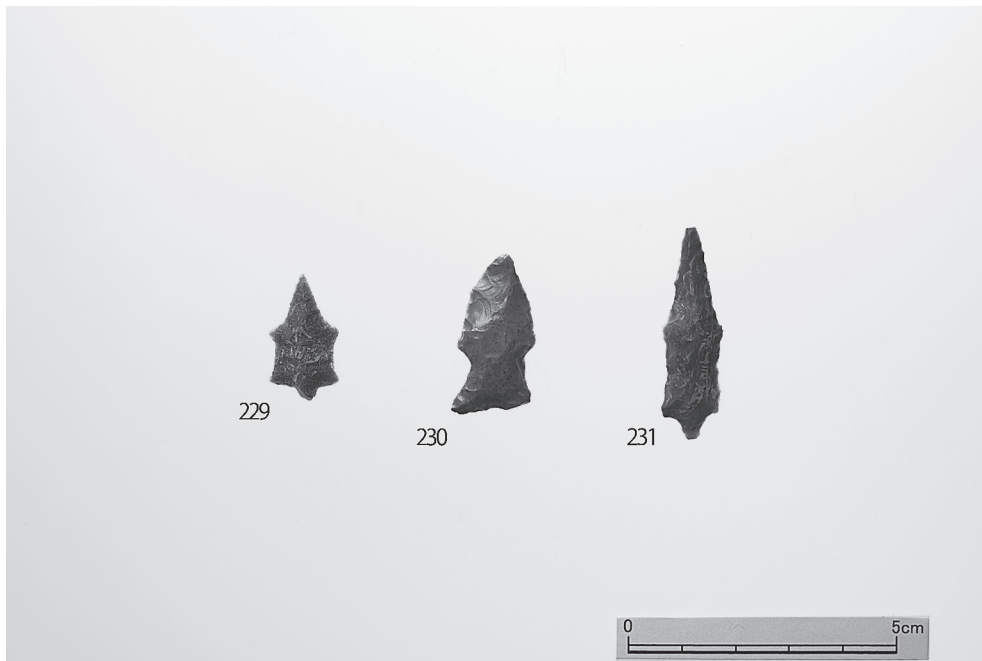
2 平基無茎石鏃



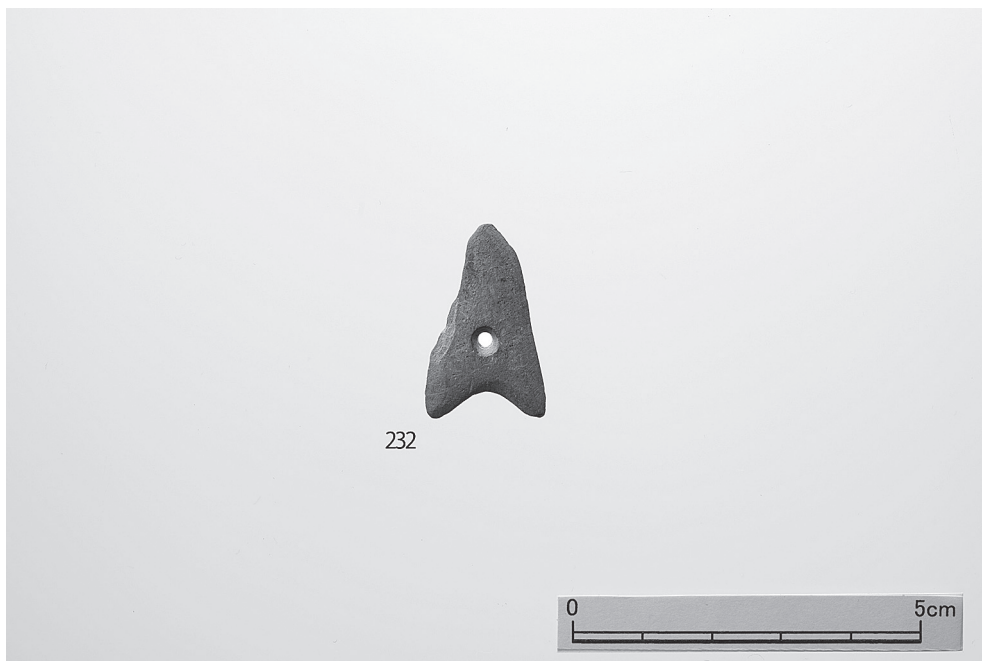
1 円基鏃



2 尖基鏃



1 飛行機鏃・アメリカ式石鏃



2 有孔磨製石鏃



1 石錘



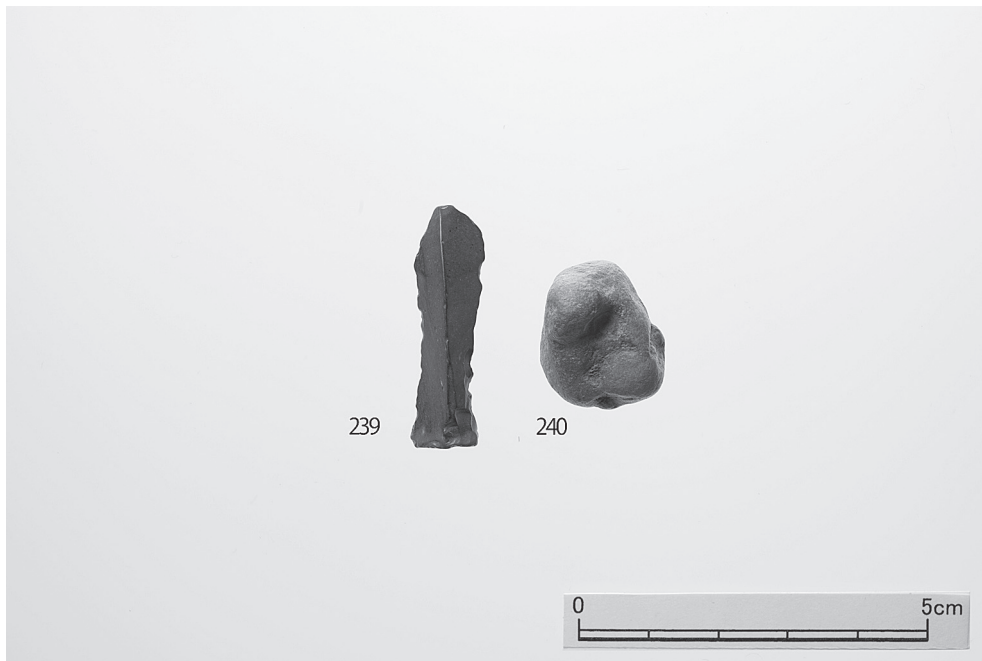
2 石劍



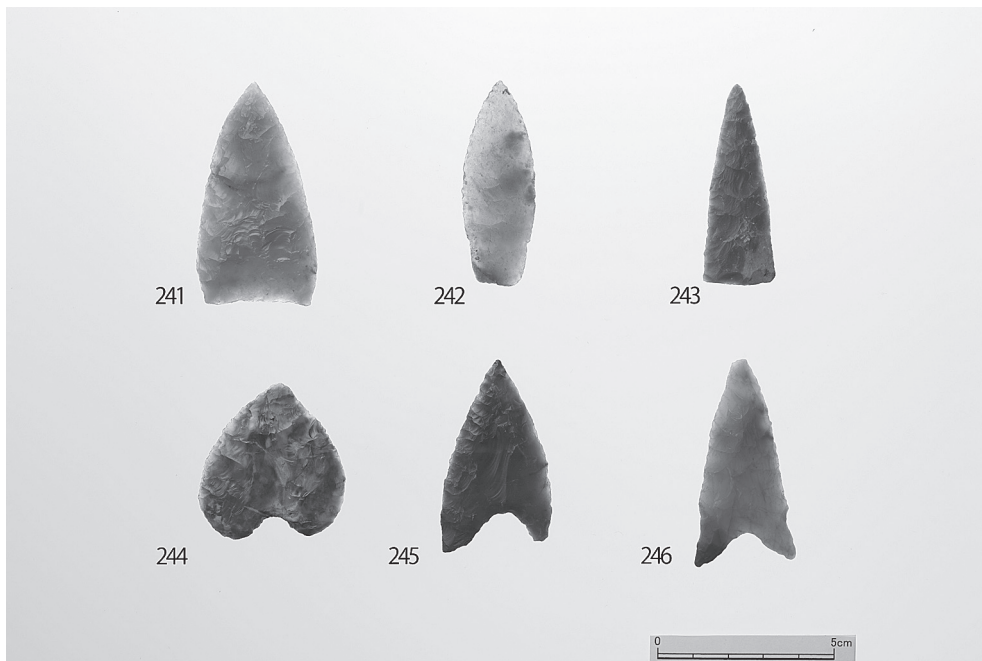
1 両頭石棒



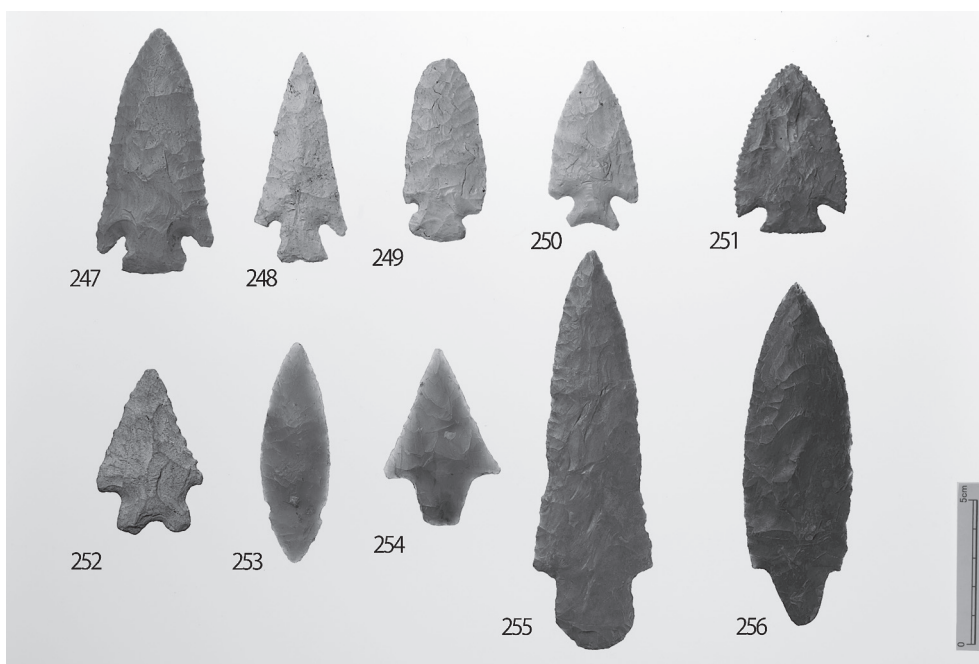
2 鋸齒状石器



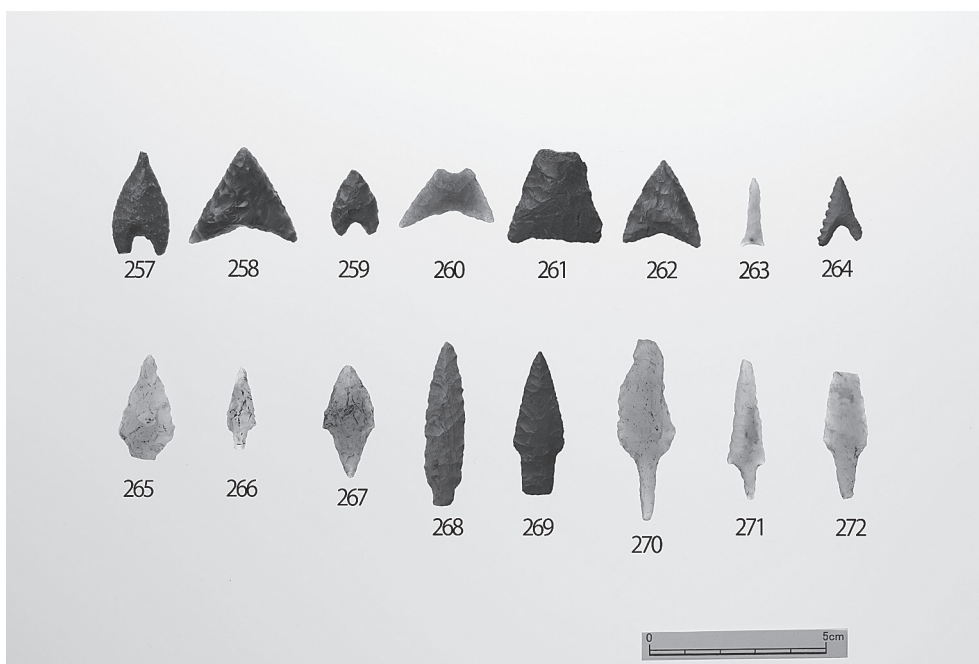
1 未成品



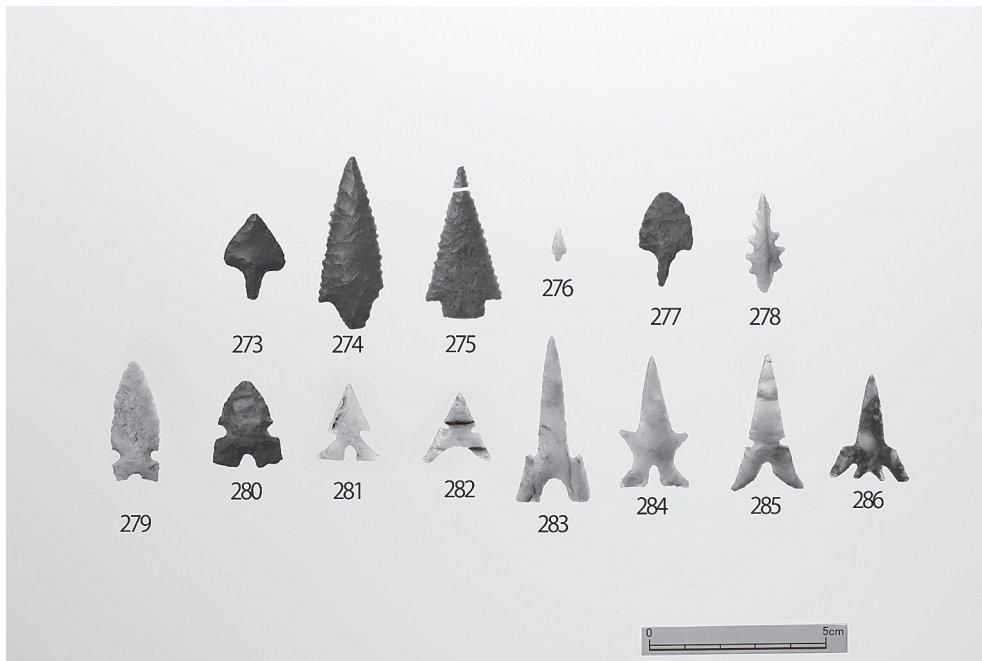
2 尖頭器



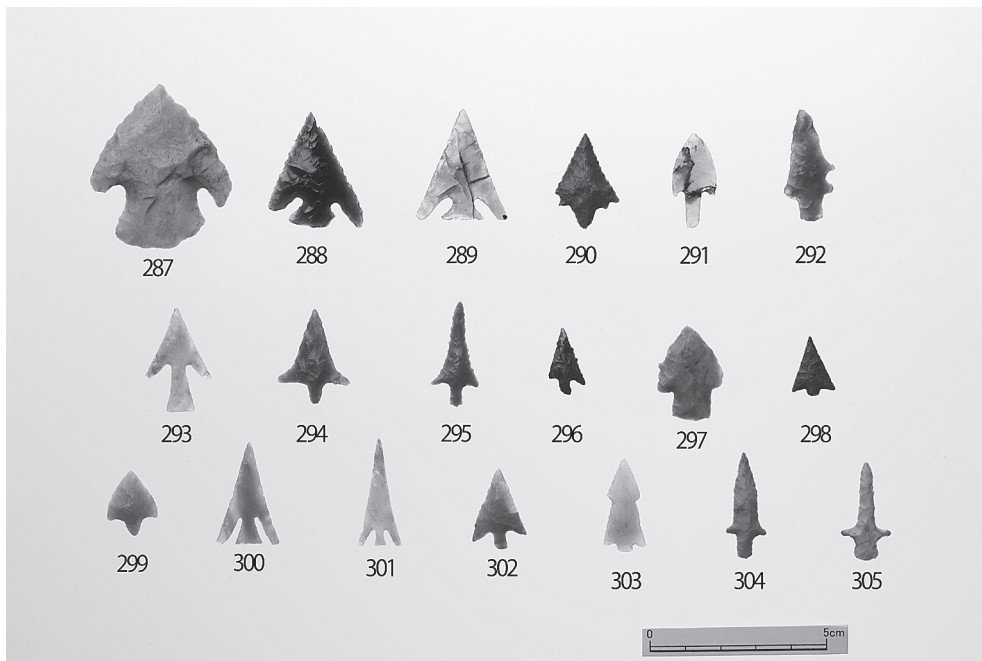
1 有舌尖頭器



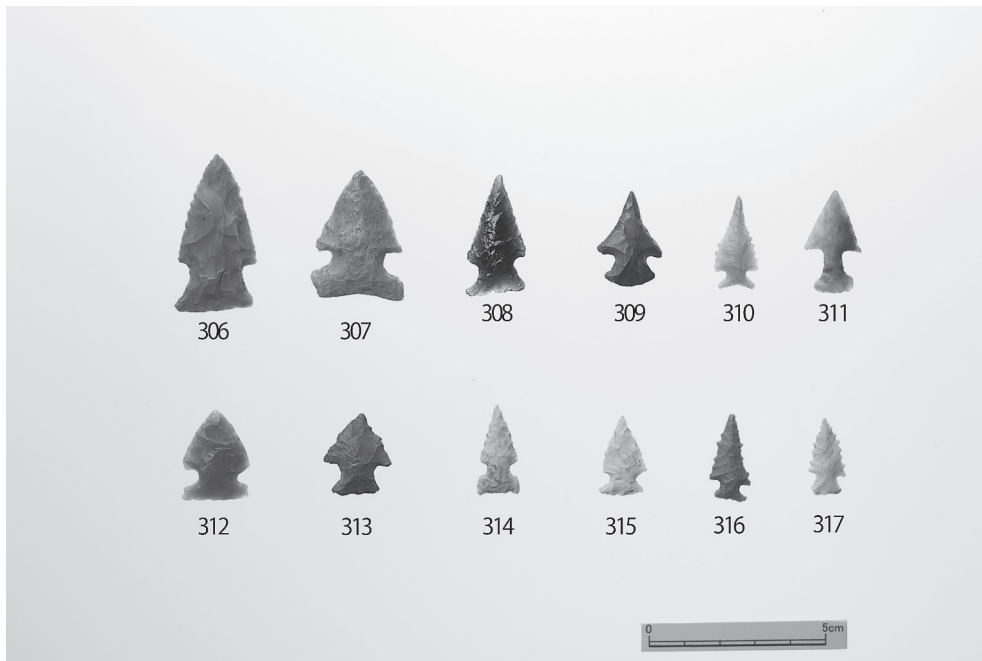
2 凹基無莖石鏃・凸基有莖石鏃



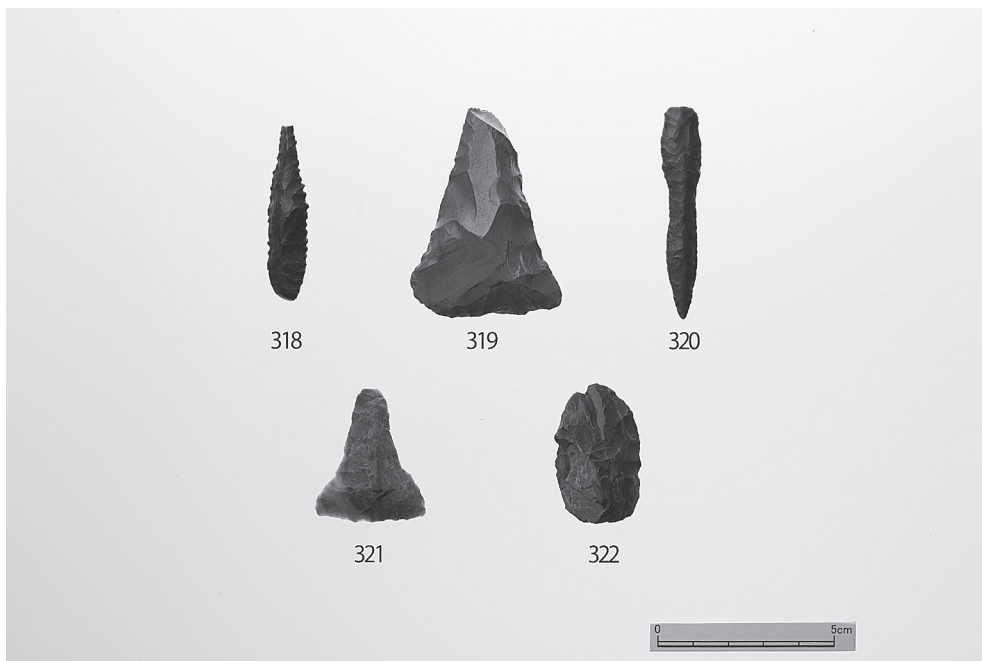
1 平基有茎石鏃・二股式石鏃



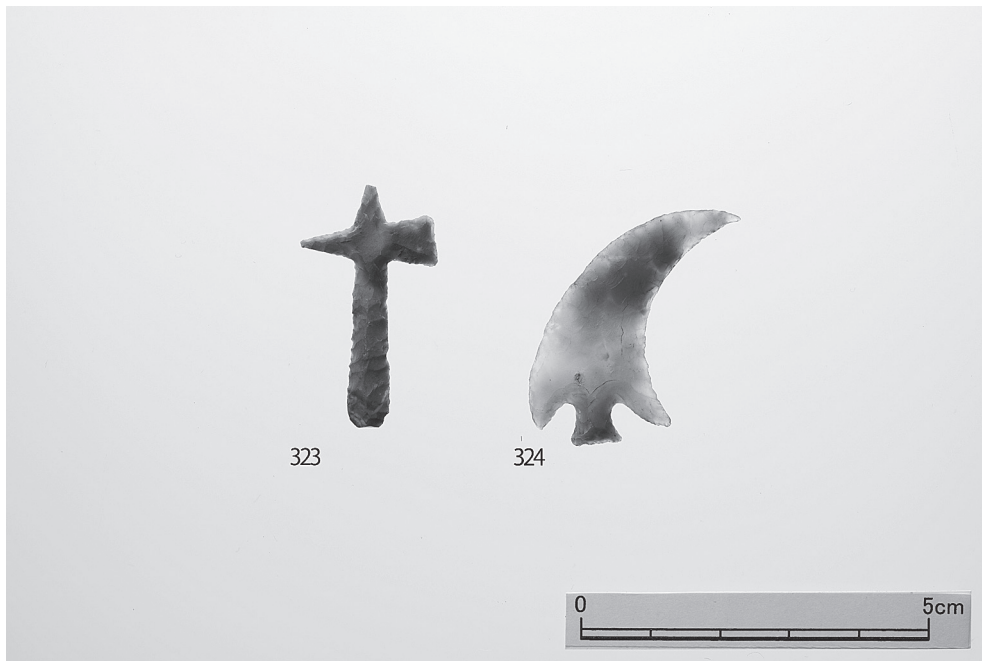
2 かえしつき有茎石鏃



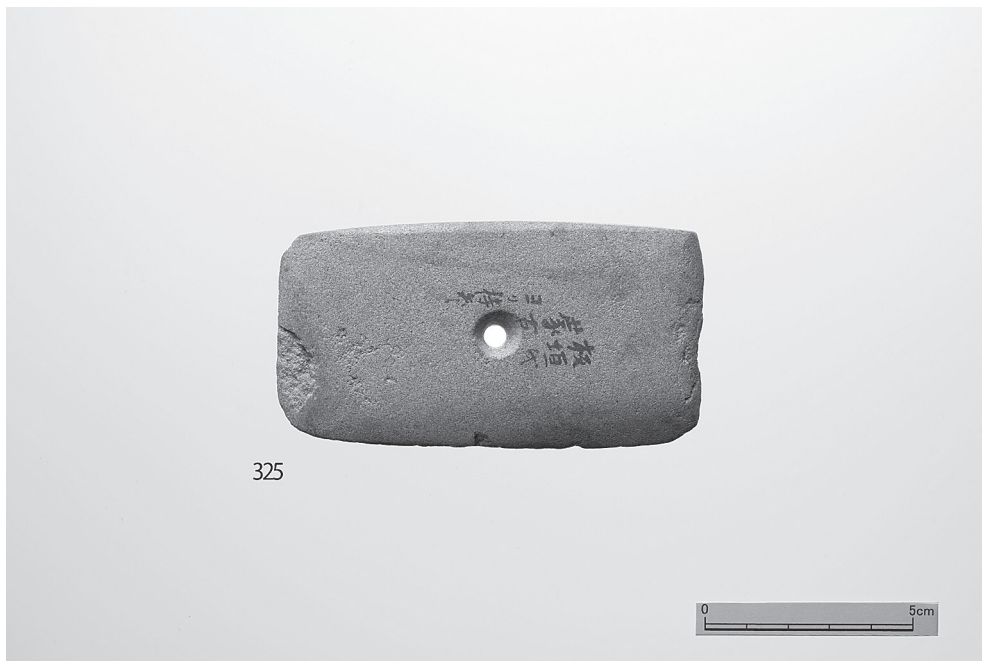
1 アメリカ式有茎石鏃



2 円基鏃・筥状石器・石錐・未成品



1 名称不明



2 石包丁



1 石杵

Stone tool collection donated in the academic year of 2014

NYOHJOI Keita

This report introduces a stone tool collection donated by Mr Ichiro and Jiro KITAMURA in the academic year of 2014. There are more than 300 items collected by both gentlemen with wide range of interests. These include overseas stone tools as well as domestic items of both the Jomon and Yayoi periods. This paper shows the contents of the collection which became clear through registration those items, attaching the list of materials and photo plates.

古墳時代倣製鏡の参考資料

新井 悟

はじめに

本論の目的は、南山大学人類学博物館が所蔵する鏡の資料紹介である。この鏡は購入品であり、古墳名や地域名などの具体的な出土伝承は伝わっていない。

ところで本資料には、古墳時代の鏡を手本もしくは原型として、模作もしくは踏み返した、後世の作である可能性がある。そういう事情があるので、ここでは類例の少ない古墳時代後期の倣製鏡の、鏡背紋様に関する参考資料として扱うことにした。ただしこの報告の時点においては、自然科学的な分析は実施していない。上記の所見は、あくまでも肉眼観察によるものであることを断っておきたい。

このような所見を表明したことにより、以下では、最初に疑問の所在を明らかにし、その後に紋様など鏡の属性の紹介を行う。

なお本論において鏡の部分を指示する場合、写真4を基準とする。写真4は、鈕から4乳を結んだ線が座標軸のようになるように回転させたものである。第I象限にあたることをA区とし、以下同様に第IV象限をB区、第III象限をC区、第II象限をD区と呼称することにした。また各区の上下左右の表現は、観察者が外方から鈕をみる方向から記述した。

1. 後世の作の可能性

肉眼観察の所見であるが、本資料は古墳時代の倣製鏡を手本にして模作したか、もしくはそれを原型にして踏み返した後世の作である可能性が高い。このように判断した主な理由は、金属の色である。

鏡の現状は、全体が錆でほぼ覆われている。しかしところどころに金属の光沢面がのぞいている。その部分をみると、赤褐色もしくは黄褐色である。古墳時代の集落や古墳から出土した倣製鏡で観察されることの多い、いわゆる白銅色の光沢面は本資料では認められ

なかった。この点に関しては、本資料が南山大学人類学博物館に収蔵される以前の所有者も関心があったと思われる。A区とB区との間の乳の頭が研ぎ出されているのが観察されたが、おそらく必要最小限の範囲で金属の色を確認した跡であろう。この面の色味も、赤褐色もしくは黄褐色である（写真5）。

金属の色の肉眼観察による所見だけでは後世の作であると断定はできないが、疑問のある資料が注意されずに周知されていくのを防ぐため、ここではその可能性を指摘しておきたい。

2. 鏡の概要と紋様構成

鏡の直径は17.8センチ、重量は630グラムである。半球形の鈕に貫通する鈕孔の開口部の形態は、いずれも長方形である（写真2・3）。鏡面は反りを有する。

紋様構成は、大きく外区と内区からなる。

外区は、幅広の素紋縁の内側に鋸歯紋帯が二重にめぐり、外側の鋸歯紋帯は一段高く、幅も狭く鋸歯文も小ぶりである。この内側に突線表現の菱雲紋帯が配され、さらに断面三角形の突帯がめぐり、菱雲紋帯側の突帯の長い斜面には鋸歯紋が、内区側の短い斜面には櫛歯紋がある。

内区は、内区外周と主紋様帯にわかれる。内区外周は、擬銘帯の上に方形が6個配された、半円方形帯の変形ともとれる紋様帯がめぐり、主紋様帯は、素紋の円座をもつ乳が4個配され、全体を4区画する。

鈕座は、幅広の半円形の突帯上に突線表現の菱形紋を配したものである。

3. 内区主紋様帯の図像

前述のように4区画された各区には左向きに走駆する獣形が1頭あてられ、全体としては四獣形紋が主紋様となるが、それ以外に獣か神像か判別のつかないほ

ど異形化した頭部表現が全部で7個ほど各所に配置されている。これは、本来、頭部表現だけが配置されたものではなく、中国製同向式神獸鏡系の乳をめぐる獸形が意図されていたものと推測される。乳周辺の意味不明の充填紋のうちに、こうした獸形の胴部があると考える。ただし頭部と胴部がセットになると明確に判断できるものは少ない。C区の右側乳の左側にあるナメクジ状の浮彫の上に短い単線を斜めに配した胴部表現と、その上端部にある頭部表現が、同向式神獸鏡系の乳をめぐる獸形の姿をとどめているようであり、これと同じものがA区左側の乳にある。

そこでここでは、各区の獸形について記述した後、各所にある頭部表現をできるだけ統一的に把握して紹介することにした。

A区の獸形は、頭部が鳥像のそのように小さい。側面形で表現された頭部は、小円圈1個で示した眼と、単線により嘴のように描かれ開口部で構成される。また頭部から二又にわかれた角が後方にのびる。胴部と脚部はしっかりとした浮彫で表現されるが、脚部は前脚・後脚とも手前側しか表現されず、奥側は描かれない。

以下B・C・D区の獸形は、基本的には胴部・脚部はA区の獸形と同じで、頭部にそれぞれの違いがあるので、その部分を記述する。

B区の獸形は、頭部が大きな浮彫で表現される。A区の獸形の頭部が側面形で表現されて、眼も手前側しか示されなかったのとは異なり、両眼が表現されたものとなっているが、開口部は側面形で表現されているのでややネジレをきたした印象を覚える。二又にわかれた角をもつ。

C区の獸形は、A区の獸形のように眼と開口部のみで構成された小さめの浮彫である。ただし異なる点は、両眼を表わした点にあり、しかも奥側の眼は鼻梁に目尻が隠れたように表現されているので、B区の獸形の頭部のようにネジレた印象は少なく、その分、立体的に示すことに成功している。二又にわかれた角をもつことは、A・B区の獸形と同じであるが、さらにハート形の浮彫表現が付加された点が特徴的である。

D区の獸形は、B区の獸形に次ぐ大きさのものであるが、鑄出しが悪く頭部の表現が不鮮明なために詳細は不明である。またD区の獸形のみ無角である。

このように四獸形紋は、それぞれ頭部に特徴をもつ。無角のものが1頭と、二又にわかれた有角のものが3頭あり、有角のものうち1頭はさらにハート形の浮彫表現が付加されたものであった。

次に各所に配された頭部表現を記述する。

最初に内区主文様帯のどこに7個の頭部表現が存在するのか明らかにしておく。また記述の便宜上、A区から順に頭部1(A区右舌)のように番号を付しておくことにする。

A区には頭部表現が2個ある。

頭部1(A区右下)は、獸形の後脚と尾の間に左向きで、別の言い方をすると、尾の先端から臀部にむけて、正面形で描かれる。やや太い単線の鼻梁の両側に小円圈により示された両眼があり、口は単線で半円形に表現されたものである。またこの半円形に付属する短い単線は鬚であろうかとも推測される。

頭部2(A区中央下)は、獸形の胴下部の前脚と後脚との間に、頭部1と対向するように正面形で描かれる。表現は頭部1と似ているが、口の形状が楕円形に近いのと、頭部1で鬚の可能性を推測した短い単線がない。

B区にも頭部が2個ある。

頭部3(B区右上)は、A・B区間の乳の上に、正面形で、頭部2(A区中央下)と同じ方向に、頭部1(A区右下)に対向するように描かれる。表現は頭部1と似ている。この頭部3には、胴部らしきものがある。それはA・B間の乳の右側にあるナメクジ状の浮彫の上に短い単線を斜めに配した表現である。

頭部4(B区右下)は、獸形の後脚と尾の間に右向きで、つまり、臀部から尾の先端にむけて、頭部2(A区中央下)・頭部3(B区右上)と同じく頭部1(A区右下)に対向するように描かれる。鼻梁と両眼・口で構成されることは他の頭部表現と同じであるが、やや鑄出しが悪く判然としない。

C区の頭部表現は1個である。

頭部5(C区右上)は、B・C間の乳と獸形の臀部の間に左向きで描かれる。表現は頭部1と似ている。この頭部5には、胴部らしきものがある。それはB・C間の乳の左側にあるナメクジ状の浮彫の上に短い単線を斜めに配した表現である。

D区には頭部表現が2個ある。

頭部6(D区右上)は、C・D間の乳と獸形の臀部の間に左向きで描かれる。表現は頭部1(A区右下)と似ている。単線の半円形で示された口の下に鬚と推測される短い単線が付属するが、頭部6(D区右上)ではさらにやや長めの楕円形の浮彫の上に短い単線を斜めではなく水平に配した表現が二つある。これは胴部を表現した可能性もあるが、断定は避けたい。

頭部7(D区左下)は、獸形の頭部と前足の間に、

右向けに描かれる。表現は、頭部1（A区右下）にあった鼻梁がなく、両眼と口との間に横に線が引かれ、両眼の上に髪が単線で示される。

これらの頭部表現は、獣形を4頭配置したあとに残った空隙に、任意に、充填文としてあてたというより、その配置に中国製の画紋帯同向式神獣鏡B型の乳をめぐる蟠龍紋が意識されていたろうと推測される。

画紋帯同向式神獣鏡は、上段に伯牙弹琴像、下段に天皇大帝、中段の左右に東王父・西王母を配置する。これら4像の間に獣形を配置する余白が生じる。A型とされるものは側面形の走獣を置くが、B型とされるものは乳をめぐる蟠龍紋が配置される（樋口1979）。このB型の蟠龍紋の配置には一定の組み合わせがあり、もっとも多いのは天皇大帝の左右の蟠龍紋と伯牙弹琴像の左右の蟠龍紋とを、それぞれ対向させる方式である。

本資料では、頭部5（C区右上）と頭部3（B区右上）とはそれぞれナメクジ状の浮彫の上に短い単線を斜めに配した胴部表現をもってB区の両側に対向するように配置されている。仮にB区の獣形を天皇大帝に置き換えれば、画紋帯同向式神獣鏡B型の配置となるのである。しかし、残る二つの乳（A・D間の乳とC・D間の乳）においても画紋帯同向式神獣鏡B型の蟠龍紋の配置を貫徹して表現することができなかつたのであろう。

なお、A・D間の乳の左右（これまでの約束を離れ、写真4の上下左右で表現した場合）に、頭部1（A区右下）と頭部7（D区左下）が置かれているのは、かろうじて蟠龍紋を対向させるという意識が働いた結果としてみておきたい。このとき、A・D間の乳の下（同上の表現方法）にある、やや弧を描いた浮彫の上に単線を配したものの2個を、頭部1（A区右下）と頭部7（D区左下）の胴部とするのは考えすぎであろうか。

また7個の頭部のうち残る3個の、頭部2（A区中央下）と頭部4（B区右下）と頭部6（D区右上）は、画紋帯同向式神獣鏡B型の配置の意識を離れて、充填紋としておかれたとみておきたい。

このように本資料の内区主紋様帯には、4個の円座

乳で区画された4区画に、求心式に獣形を配置する発想と、その4個の乳に画紋帯同向式神獣鏡B型の蟠龍紋を配置する発想とがみられた。またこれに加えて、後者の貫徹が放擲されたことと、埋め草としてさらに3個の頭部表現が付加されたことに、凶像構成を理解することが難解であった理由が求められるのである。

おわりに

本資料の類例には、伝宮崎県・持田第25号墳出土鏡、京都府・幡枝1号墳出土鏡、出土地不詳・明治大学博物館所蔵鏡などがあり、いずれもいわゆる「火鏡」銘がある（新井・大川1997）。またこれらは、森下章司によって、「獣紋鏡」とされ、古墳時代中期後半の年代が与えられている（森下2002）。

3面の「火鏡」銘鏡のうち、特に持田第25号墳出土鏡については、4区画された内区主紋様帯に主紋様として獣形が配置されるが、本資料のような頭部表現が2個ほど充填紋として使用されている。この頭部表現の存在理由について、これまで説明されてこなかった。

本資料紹介で推測したように、画紋帯同向式神獣鏡B型の蟠龍紋が影響した鏡が製作され、その後急速に蟠龍紋の胴部が失われ、B型の配置の意識が失われてしまった結果と考えられるかもしれない。「倭の五王」の鏡にふくまれる画紋帯同向式神獣鏡の影響を考える余地を推測できる可能性がある。

とはいえ冒頭お断りしたように、本資料には後世の作の可能性がある。自然科学的な分析を実施していない現段階にあつては、以上の推論を適用することはできない。

参考文献

新井 悟・大川磨希 1997「火鏡銘をもつ倣製鏡の新例について」『明治大学博物館研究報告』第2号 明治大学博物館事務室

樋口隆康 1979『古鏡・古鏡図録』新潮社

森下章司 2002「古墳時代倭鏡」『考古資料大観5 弥生・古墳時代鏡』小学館

（川崎市市民ミュージアム）



写真1 四獸形紋鏡



写真2 鈕孔 (拡大)



写真3 鈕孔 (拡大)



写真4 四獣形紋鏡（拡大）



写真5 研ぎ出されたA・B区間の乳の頭部分

Reference material for imitative mirrors of the Kofun period

ARAI Satoru

The purpose of this article is to introduce a bronze mirror owned by Nanzan University Museum of Anthropology. The item is purchased one, and its provenance, such as the name of tumulus or even its region, is unknown. It is also possible that this is a later imitation. Because we have not carried out a scientific analysis, it is, at this stage, appropriate to introduce this as a reference material which might transmit the design of imitative mirrors produced in the Kofun (Tumulus) period.

The mirror has a diameter of 17.8 cm and weighs 630 grams. The main design is 'beast shape' arranged on the widest design band called 'interior field' which is divided into four parts.

Besides, (probably) seven beast-head ornaments are used as filling design on the same field. The arrangement of the beast heads seems to be at random. Concerning the very point, this paper suggests that the worker would have been conscious of the arrangement of dragon motif which is found on wide image-band deity-and-beast mirrors, B-type, made in China.

There are samples similar to this item among those in the later part of the middle Kofun period. Some mirrors of this period only have head-shape expression as incoherent filling design; the reason for adopting such a design has not been identified. If our hypothesis can be accepted, it would be possible to suggest that there was some influence of wide image-band deity-and-beast mirrors, supposedly included in the mirrors of the 'five Kings of WA'.

Even so, it is inevitable to make a scientific analysis of this item because of the possibility of later production.

2017年1月6日 印刷

2017年1月11日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第35号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone 052(832)3147 (直通)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20

Phone 052(871)9190